

緋弾のアリア with水竜 の巫

月見草クロス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ちよつと変わった少年 白福水とその周りを取り巻く様々な人物が活躍するお話。

注意

文才は期待しないでください。

誤字も多いので誤字報告して頂けると嬉しいです。

まだ最新刊まで追いついていないので矛盾と思われれます。

AA要素も含まれます。水くんは男の娘です。

Twitter 月見草クロスで検索。

目次

プロローグ	1
水とレキ	5
水とりこりん	11
水と白雪	15
水とアリア	20
術集合と双剣双銃	26
水と研鑽派	33
水と咲	38
水と二人	52
ライファイエンドと璃々神	61
水と咲　　く馬鹿な二人く	70
美癒と千葉兄弟	81

水と美癒	92
水とライファイ	104
水とライファイ Part 2	111
超能力と超々能力	116
思いと決着	123
水と雪	131
水と命	137
キンジ達と雪	143

プロローグ

「むーん……………勝てねえ」

そんなことをぼやいて勝てる訳じゃないのだがそこは人間だからしょうがない。

「やっぱり才能か」

そんなことをぼやきながら一キロ先の缶を無表情、無口で撃ち抜く彼女をぼんやり眺める。

「僕も頑張るか!!」

僕、白福水しろふくみずは彼女、レキの自称ライバルだ。

東京武偵高校 2年C組 狙撃科スナイプSランク 白福水。絶対半徑キリングレンジ1526m。

何より目立つのは水色の髪と透き通るような青い目、そして中性的な見た目らしい。身長は142cmと悲しくもチビの中のチビ。男子でこれは無念である。

武器はドラグノフ狙撃銃。一応のマカロフPMと言うハンドガンに二刀流の短刀イロカネシズメ。

しかし裏の顔は水竜に仕える武装巫ぶそうかんまぎ。

本当は水属性の魔法を得意とする魔法使いでその為の札や払い棒こと杖も常備している。

実はイロカネシズメも巫系列で持っている武器だ。

そして僕のライバル。

東京武偵高校 2年C組 狙撃科Sランク レキ。絶対半径2051m。

ミント見たいな髪の色。目は金色っぽい黄色。細くて背は150cmって言った。

何よりも無表情、無口でいつもヘッドフォンでなにか聞いてて影が薄く『ロボットレキ』何て呼ばれてる。

まあ、それは一般的にで何だかんだ一緒にいる時間の長い僕にはほんの少し顔に感情が表れているのを知っている。

ホントに少しだが。

武器はドラグノフ狙撃銃。ちなみにパクったのは僕でレキに少しでも近づける気かして買った。

まあ、こんなものである。

他に言うならば僕はレキをライバルと言いながら協力したりする。クラスで席も隣。隣になりたいと言い出したのはレキだった。

そんな僕にはもちろん友達がいる。

遠山キンジ。

2年A組 探偵科Eランク。インケスタ だけど昔は強襲科のSランクだった。

身長は170cm。あまり人と関わりたがらずネクラとか昼行灯とか言われてる。

髪も黒いし何となく鋭い目でたまにキザになる。

理由はまだ言わないけどキザな時は強い。

キンジとは一年から仲が良く任務にもよく一緒に行った。クエスト

もちろん友達はまだいるが随時話していこう。

あ、そう言えば武偵の話をしてなかった。

武偵

簡単に言えばなんでも屋。

色んな科目に分かれていて強襲科、アサルト 狙撃科、スナイプ 探偵科の他にも諜報科、レザド 救護科など多く

ある。

まあ、そんなところだ。

これはこんな水くんやその仲間の作り上げる新しい話

水とレキ

水「学校終わり!! 帰るべき!!」

何か意味のない言葉を叫び、自室を指す。

ちなみに僕の部屋は四人部屋を独占していて広い。

キンジ「お前、たまにおかしくなるよな」

水「言うな」

そういう性格なんだ気にしないでくれ。

「あ、水ちゃん」

水「あ、木下くんお疲れー。でもちゃんはやめてー」

キンジ「お前やつぱりその見た目言われるんだな」

中性的な見た目の僕は可愛い部類らしくよくからかわれる。

皆は可愛がつてるんだって言うけど………こっちはいい迷惑だ。

水「うるせーな、キンジ。そのうち撃ち殺すぞ?」

キンジ「そこにハテナがついちやうから可愛いんだよ」

水「?」

ちよつと何言ってるか分からない。

キンジ「まあ、いいか。またな」

水「また明日ー」

自室に行きドアノブを捻る。

あ、今日も鍵が開いてる。先客がいるらしいね。

水「おーい、レキ。またかよー」

レキ「……………?」

さっきの僕のようにちよつと何言ってるか分からないって首を傾げるのはライバルのレキさんだ。

レキ、なぜか僕の自室に来ることが多い。しかも連絡もなしにだから面倒だ。

レキ「何か問題ありますか?」

水「普通、男子と女子が一つの部屋は危険な状況だよ」

レキ「?」

やつぱりちよつと何言ってるか分からないって首をかしげるな。何となく分かってるけど受け流してる顔してるような気もするが気のせいだ。

水「はあ……………どうせカロリーメイトしか食べてないんだろ。ご飯作るから待つてろ」

しかしレキは今まで力づくで追い出そうとしたりもしたが結構力が強くて追い出せなかったし追い出したら追い出したでドラグノフで窓を割って来るんだからたまったものじゃない。

最近はずいぶん大事だとわかった。

今日は何を作ろうか………そうやって冷蔵庫を開ける。

げ!!何もねえ!!

くつそー、誰かさんが食い荒らして行ったな。

十中八九あいつだ。ほんと、なんでこんな人達ばかりなんだろ、武偵^{こご}。

水「レキ、冷蔵庫がやられてた。外食だ。行くぞ」

レキ「はい」

レキは特に怪しむことも無くこうやってついてくるけどこれでつれてかれたりしな
いかなんか心配だ。

水「で、どこ行く?」

どうせ、どこでもいいって言うだろうけど一応、聞く。

レキ「どこでもいいです」

水「だよなー………」

予想通りの答えだ。

(しかしどこ行く?.....あ、そうだ。あいつの所行ってみるか)

水「よし、レキ。ちょっと和食屋行くぞ」

レキ「はい」

相変わらず小さいが少し喜んでるかな? どうだろ?

「おふたり様でござい.....む? レキ殿に水殿?」

この忍者みたいな喋りをするのは風魔陽菜。キンジの戦妹。科目は諜報科。

ちなみに戦妹アミカ言うのは簡単に言えば弟子だつてことだ。僕にもいる。

いつもは口を隠してるのだが流石にバイトなので外してるな。

そして彼女は高等な忍者の末裔だという噂もある。やってること忍者だし僕は本当だと思う。

彼女の家はかなり貧乏らしくバイトをしているのだが喋り方のせいでクビになることがほとんどらしい。ここで働いてるってキンジに聞いてたんだ。

陽菜「歓迎しますぞ。さあ、席へ」

水「ありがとう」

まあ、普通にいい子だ。なんか可哀想だからたまに奢ってる。

水「レキ、何食べる?」

レキ「なんでもいいです」

水「じゃ、定食にしよっか。風魔、定食2つ!!」

陽菜「わかったでござる」

というかなんでライバルと後輩の働く店に行くんだよ。前代未聞だな。

水「なあ、レキ」

レキ「なんですか？」

水「お前、なんで僕についてくるんだ？」

レキ「風がそう言ってます」

……………出たよ、風。

イマイチわかんないのだがレキは風の命令に従っているなことをよく言う。

彼女は自分が何者か分かるらしいが僕はそれを追求しない。

何てったって僕もまだ誰も知らない秘密がある。

ブルル……………

噂をすれば電話だな。

水「よつす、りこりん。また食い荒らしやがったな」

『ごめんごめん。そんなことよりみーくん今、大丈夫?』

水「すまん。今はレキといるんだ。後でかけ直す」

『それなら明日の休みに会おう。迎えに来るからー』

水「了解だ」

陽菜「お待たせした!!定食にござる」

タイミング良かったな。

ま、今日は何も考えずのんびりするか。

水とりこりん

.....

むう.....小鳥の声が聞こえる.....

「みーくん、みーくん」

りこりんの声がす.....ん？

水「理子お!!」

理子「おー、起きた」

恐らく忍び込んでたんだろな。

峰理子

二年A組の探偵科イシケスタのAランク。

身長、147cm。髪はツインテールに結んでいる。童顔の美少女で少しお調子者のクラスのムードメーカーらしい。

しかしそれは表の顔でしかない。

水「で、話って?」

理子「まだもう少しあとの事だけどジャンヌと夾竹桃きょうちくとうがこっちに来るんだって」

水「……………堅物女騎士と百合趣味蠍女か」

理子「あの二人のこと嫌いなの？」

水「逆。信用してるからこんな事言うんだ」

理子と僕は結構長い付き合いだ。

ちなみにさっきのジャンヌと夾竹桃とも長い付き合い。

理子「で、これからは本題だ」

あ、出た。裏理子。

理子はよくわかんないけど真剣になると口調が強くなる。

理子「そろそろイ ウーのナンバー2、ブラドの情報はあつたか？」

水「いや、まだなんにもなんだよな……………尻尾も掴めてねえ」

そう。そうなのだ。

僕と理子、そしてさっきのジャンヌや夾竹桃が入っている組織。国家機密の危険集

団。

イ ウー

または伊^イウ^ウ。

全員が先生で生徒でありそれぞれの技術を教え合い、強くなっていく場所だ。

上位の奴らは遺伝子を移すなどしてその能力さえも移し合う。そして僕も遺伝子を

いくつも貰っている。

理子はイ ウー内でもそこまで上位では無いが僕は信じてもらえないかもだがイ
ウー内でもかなりの強さを持つ。

そして理子の裏の顔。

峰理子リユパン4世。あの大怪盗 アルサーヌ・リユパンの子孫だ。

昔、ブラドに飼われていたらしい。何とも残酷だ。

僕がそんな組織にいる理由は二つ。

一つ目は理子のライバル、ホームズを冠するものを倒し、理子を苦しめる吸血鬼 ブ
ラドを倒すこと。

二つ目はまた後々明かすことにする。

理子「やはり、そう簡単にはいかないか」

水「でも夾竹桃が言ってた間宮には接触できた。うちの戦妹アミカが仲良いからそつちは簡
単だった」

理子「へー、どうだった？」

……………ノーマル理子に戻ったな。

水「ただの雑魚武偵に見えたがなんか隠してるな。十中八九、間宮の技だろうけど」

理子「分かった。伝えとくね」

大事な話が終わると理子は可愛らしくクルつとターンする。

理子「じゃ、せつかくだしどこか行こう!!」

水「言うと思った。着替えるから出てけ」

理子「はい」

着替える前に理子が仕掛けたと思う隠しカメラに向けてナイフを投げておく。

理子「あつ」

部屋の外から理子の声が聞こえたが無視だ。

こいつのこういう所はもう慣れてきたしな。

水「で、どこ行くのさ?」

理子「うゝ……………ゲーセン!!」

水「おけ。クレインゲームで荒稼ぎだな!!」

こうしてまだ平和な僕らの日々は過ぎていく。

水と白雪

どうもー、水です!!

今、僕はSSR前に来ております!!

というか!! やっぱりここはなんかオカルトチックで苦手だあ!! 超能力って割と和風なものもあるんだよ!! 僕や今用事がある人みたいに。

理由は簡単!! 幼なじみに会いに来ております!!

水「おーい!! 白雪ー!!」

白雪「あ、水くん」

星伽白雪

ほとぎしらゆき

見た目は言うなれば大和撫子。日本風な美人。

性格は真面目でちよつとヤンデレちゃんだ。昔からキンジのことでおかしくなることがある。

理由は僕は知ってる。なんだかんだ僕は応援しているよ!!

で、彼女は武装巫女だ。

僕は水竜を神とする武装巫だが、白雪は………知らない。聞いたことない。

しかし僕達の一族と星伽家は関係がある。

詳しく知っているが話す気は無い。

でもあのイロカネに関係すると言っておこう。

白雪「今日はどうしたの？」

水「いや、ちよつと遊びに来ただけ」

白雪「……………じゃ、帰ってー」

水「ああおあ!?!嘘!!嘘だから!!」

白雪は僕に対してあたりが強い。

ちなみにキンジには優しい。理由はお察しだが。

白雪「で、何？」

水「超能力がそろそろ訛ってきたから……………ね？」

超能力は長いこと使わないと体と同じで訛る。いざという時使えないと困るけど使える相手が超能力を使える相手じゃないとやっぱり厳しい。

白雪「なるほどね。じゃ、いつも通り屋上に行こうか」

水「了解だー」

〈SSR棟屋上〉

水「言つとくけど軽くだからね!!」

白雪は僕と同じ超偵（超能力の使える武偵のこと）。

白雪は鬼道術という火に特化した術を使う。

僕は術名こそないものの水に特化した術を使う。

名前の由来はそこからだろう。単純すぎな。

白雪「分かっているって技なしでちよつと刀に火を付けるくらいだから」

水「一回、マジで殺しに来たことあるからね……………」

白雪「あの時はエイプリルフルだったから」

水「分かるけどさ!!」

僕はイロカネシズメ……………二本の短刀を取り出す。

ちなみに短いといえどナイフとかほどじゃなく白雪の出した日本刀……………イロカ

ネアヤメの半分くらいの長さだ。

白雪「行くよー」

水「こつちも!!」

白雪のイロカネアヤメは赤い火を纏い、僕のイロカネシズメは青く光り、水を宿した。

「はあ!!」

白雪の刀を僕は短刀をクロスにして防ぐ。

すると火は弱まってしまふ。

当たり前だが火は水に弱い。当たり前だ。

白雪「このお!!」

水「『水吹き』!!」

僕は口からすごい速度で水の塊を放つ。

水吹きは口の中で作り出した水を発射する水の弾丸。

弾丸と同じ火力を出すんだ。

白雪「危なっ!?!」

まあ、そんなのに当たるまでもなく刀で斬る。

流石は星伽の巫女。普通は無理だろ。

水「剣術じゃ勝ち目ないんで!!」

白雪「やっぱり水くんには狙撃手スナイパーが向いてるよ!!」

水「分かっているわ!!」

僕はイロカネシズメを片手ずつで高速回転させ、そのまま投げる!!

水「『水月輪花』!!」

白雪「このっ!!」

白雪はイロカネアヤメで二本とも瞬時に叩き落とした。

………やっぱり、超能力と剣術じゃ叶わないな。

さて、こんな余興は終わりだな。

次の日、武偵ではチャリジャックのことについての話で盛り上がっていた。

そしてジャックされていた生徒キンジを救った転校生のこと。

やっと、目的の奴が来たね。

さ、理子。目的は同じだ。あとは容赦なし。

ジャンヌは白雪、夾竹桃は間宮、理子と僕でそいつとそのパートナーを攻略だな。

そう思いつつ俺は写真を見つめる。

逃がさねえぞ。アリア。

水とアリア

今日は久しぶりに強襲科に顔を出そうと思った。

理由も簡単で本気で殺しにかかる前に目標ターゲットの実力を知っておきたかったのだ。

水「そろそろ行くのかな」

「どこに行くんですか？」

水「強襲科行ってくる」

僕の隣にいるのは真田咲さなださき。救護科Bランク、高校1年の後輩で僕の戦妹アミカだ。白い髪に

目は薄い茶色。体つきは細くて華奢なくせに力は結構強い。可愛らしい見た目に反して野性的でキレると噛み付いてきたりもする。普段は大人しめなやつなだけどな。武器はヨーヨーという衝撃的なものだが普通に当たると痛い（というか当たりどころが悪いと気絶する）。ちなみに合金で作られていて防弾性、物理で壊すなんて不可能で僕の知ってる限り最も固い物体だ。平賀さんに作ってもらったらしいけどこの野生女によくもこんなものを与えてくれたよ。怒らせたら振り回してくるから恐ろしいこと恐ろしいこと。

そしてこいつは髪の毛が白いのは外人の前世がいるからだとか。そしてこいつの前

世にはあの有名な真田幸村なんだそうだな。

身長は確か145とか言ってた。僕の周りには背が低い人ばかり集まるらしい。なんでだろうね。

咲「またですか……………今度も荒らすんですか？」

水「今回の標的は何となくわかるだろ？」

咲「……………アリア先輩ですか」

水「当たりだ。いくぞ。簡単な相手じゃないけどすぐに治療できるようにな」

咲「……………はあ、分かりましたよ」

「……………まさかまたここに顔を出すことにあるとはな」

俺、遠山キンジは溜息を隠せずにいられなかった。

まさかこの地獄、強襲科に戻ることにになるとは。

理由は大変迷惑なことに席が隣になり、部屋まで占領されかけている彼女が原因だ。

神崎 H アリア

ピンクのツインテール。そして水と同じレベルの背しかない彼女だ。強襲科のSランクの最強武偵だ。ちなみに貴族らしい。

チャリジャック時に助けて貰ったもののその後の事故によりまたあれになってし

まった。

ヒステリア サヴァン シンドローム

略してHSS。俺はヒステリアモードなんて言ってるが。

簡単に言うとの性的興奮をすることで超人になれる。遠山家はこの力で代々正義の味方をしてきたらしい。

しかしなっている時はどうしても女の子が惚れるようなキザな性格になってしまう。元々、子孫を残そうとする人間の本能がさらに進化したのがヒステリアモードだかららしいが本当に嫌な体質だ。

「お、キンジ。強襲科に用でもあんのか？」

キンジ「ん？水か。どうした？」

水「もはや僕とキンジはセットじゃね？」

そんなことあってたまるかよ!!

強襲科に入った瞬間、水がたまに見る強襲科のやつを絞めていた。

白福水。

こいつはこいつで俺にとっては問題のあるやつだ。

狙撃科のSランクで名前の通り水のような透き通った水色の髪に青い目。体つきも細くて可愛らしいという言葉があう中性的なやつだ。しかし見た目に反して性格は

クールだがたまに女子みたいな性格にもなる不思議なやつだ。その差を見ると二重人格とも思える。

で、問題なのはこいつの見た目がパツと見、女子中学生と変わらないことだ。男でヒスつたりでもしたら俺は死ぬしかないからな。

こいつはたまにフラツと強襲科に来て、何人かを絞めて行くらしい。理由は分からないが。

聞く限り無敗なんだとか。

ありえんだろ？でもこれが本当らしい。

水曰く、『強襲科の強い奴らはみんな別の科に移るかいなくなるかだしな。お前含めて』

だそうだ。なんというやつだよ。

咲 「また一名撃沈ですね。治療するので来てください」
「くそっ!!覚えてろ!!」

そしてこれは本当にセツトの水の戦妹、真田咲ちゃんだな。強襲科の奴らが言うにはボコされたあと、彼女に癒される（物理的にも心情的にも）から何度も水に挑めるとか何とか。

キンジ「というか今日は気合い入ってるな」

水「おーい!!みんな!!キンジだぞーwww」

キンジ「ちよっ、おま!」

「おおーキンジ。やつぱり戻ってきたか。さあ、早く死んでくれ」

キンジ「まだ死んでなかったのかよ。お前らまとめて俺よりさっさと死ね」

水「おおー、さすが元Sランク武偵さん。大人気だな!!」

キンジ「お前もさっさと死ね!!」

水「お前の方がさっさと死ね!!」

なんとも物騒な会話だ。

そして遠くからアリアさんは傍観している。

その顔は結構驚いてるように見えるな。

水「でー……アリアってあれか?」

「?!?」

なっ……なんだ!?突然、空気がやばくなったぞ。

アリア「私がアリアであってるわ。あんたは?」

水「白福水。双剣^{カト}双銃^{ドラ}のアリアさん」

双剣双銃のアリア

豊富な実績を誇る有能な武偵には、自然と二つ名がつく。

アリアは既に持つてるらしいが俺はあまり驚かない。だって知ってるから。二つ名持ちの高校生。

水「術集合の水」

こいつが二つ名持ちなのだ。

こいつは格闘術は一つに絞らず、日本武術、中国拳法にたしかアリアの使うバリートリッドもできる。それに魔法も使えるとかだし、剣術、もちろん狙撃術や銃術も何でもかんでも術という術を覚えてるのでその名がついたらしい。日本の高校生ではこいつが初めての二つ名持ちだそうだ。

アリア「聞いたことあるわ。確か、魔術なども使える武装巫」

水「それであつてる。で、言いたいことは分かるな？」

アリア「……………いいわよ。望むところよ!!」

水「そうと決まれば屋上で勝負な」

双剣双銃対術集合

これは武偵校でも1 2を争うとんでもない闘いが始まるのかもしれないな

……………

術集合と双剣双銃

「それでは!!双剣双銃カドトラのアリア先輩対術集合アケレゲーションの水先輩の決闘を始めます!!」

そう宣言するのはアリアの戦妹の間宮あかり。

俺の他にギャラリーは多く、よく見れば強襲科の教師、蘭豹まで混じってやがる。

それもそうか。こんな対決。今後見れるか分かんないしな。

あかり「ルールはどちらかが降参、気絶した時点で決着とします!!」

あかりはハキハキというが水に貰ったカンペを読んでいるので情けなくしか見えな
いな。

あかり「それでは!!始めてください!!」

そして強襲科の屋上が声援で盛り上がり始めた。

水「そつちから来い!!」

アリア「余裕ね」

水「最初だしな」

バシユバシユ!!

アリアが目が眩むほどの速さで2つの銃ガバメントを取りだし撃った。それを水を普通と言わんばかりの顔で斬った。

しかも居合斬りでだ。

水は本当に戦うとき、刀を制服ではなく鞘にしまい腰にかけておく癖がある。これをするためなんだな。

水「腕はいいな!!速撃ちのクセに狙いが正確だ!!」

アリア「あんたに誉められたくない!!」

銃は撃つても斬られると考えたらしく銃をしまい、二本の小太刀を取り出す。

水「来いっ!!」

アリア「はあ!!」

アリアがトンでもない速度でみに襲いかかる。

ギーン!!

刀と刀が激突する。

しかし水はアリアの二本を一本で止めていた。

(剣術も水の方が強いな)

水の恐ろしい所は戦闘スタイルの多様さだ。

どういう状況でも巻き返したり応戦するき術をアイツは何か一つは持っている。

どんな相手でも少なくとも張り合う位は出来るのだ。

アリア「このっ!!」

アリアはもう一本で追撃をくらう前にバックステップで後ろに下がった。

水「次はこっちからだ!!」

水は刀を逆手持ちしてアリアに突進する。

アリアはその突進をかわし、蹴りを入れようとする。

しかし刀で受けられてしまう。

水「もう一本あるんだぞ!!」

アリアに向かってもう片方を降り下ろす………というより斜めに振った。

アリア「もう読めたわよ!!」

アリアは持っていた刀を落として防いでいた水の刀をかわし、もう一本を止めた。

真剣白刃取り。とんでもないやつだよ

水「アリアはまだまだだなあ」

すると水はその至近距離でアリアにベリーショートパンチを腹に打つこみ、アリアを吹っ飛ばした。

(今のはっ………秋水)

でもあれは遠山家の技だ。なんであいつが使えるんだよ!!

アリア「ゲホッ!!ゲホッ………何よ!!今の技!？」

アリアは咳はするもののまだ余裕ありそうだな。

それもそうか。秋水は相手に余すことなく全体重をかけて殴る技。すなわち威力は体重が重いほど強い。

結論、水が軽いのだ。身長も低ければ体つきも女みたいに細いからな。

水「流石はSランク武偵だ!!」

アリア「あんたもね!!」

アリアが小太刀を拾い上げ、水も刀を構える。

そして二人はすごいスピードで激突する。

しかしどうやら速度と力はアリアが上回るらしく水はすぐにバックステップで一時的に下がる。

アリア「やっぱりあんたはそういうのが弱点ね!!」

アリアは小太刀をしまつてガバメントを出して水に接近する。

水「くっ!!」

水は更にバックステップで逃げた。

水の弱点は一つ一つの技術の高さだ。

水は確かに多くの技を知っているが一つ一つの完成度は低い。

だからこいつと戦うときは自分の得意な戦闘スタイルで有利に展開を運ぶしかない。

アリアは力、速さ、そして近接戦が得意だ。

水もすかさずマカロフを取りだし、片手で短剣を一本持っている。

アリアは接近し終わると銃をまるで打撃武器のように使いだした。

水「アルⅡカタか!!」

アルⅡカタ

銃弾を打撃技として使う格闘術だ。

水「くっそ!!」

アリア「さっきまでの仕返しよ!!」

このままじゃ水負けてしまう!!

水「勝ったと思うな!!」

水はマカロフ一丁でアリアの攻撃に対抗するが全然だめだ。

水「このっ!!……………このやろおおおー!!」

!?

なんだ!?!この雰囲気。おかしい。あれはいつもの水じゃない。尋常ではない殺気だ。

アリア「な……………何よっ!!」

水「終わらせるっ!!」

そんなことを言って水がアリアに一発入れようとした時だった。
ドオウン!!

今まで、アリア達の戦いでは聞かなかつた重い銃声が聞こえた。

そして水の華奢な体が吹っ飛ばされ屋上の柵に激突しぐったりしてしまった。

この音……………蘭豹の……………M500!?

世界最大級の巨大拳銃、『象殺し』とも言われるその銃で容赦なく水を吹っ飛ばしたぞ。

キンジ「おい、蘭豹!! どういうつもりだ!!」

蘭豹「あいつからでた殺気が本物だったから撃った。当たり前のことしただけだろ」

お……………おいおい!! だからと言ってM500そを撃つのはダメだろ!!

そんなのまともにくらつたら水でも……………

水「いったあ!! 蘭豹このやろー!!」

……………訂正

水も化け物だからその程度は大丈夫なんだな。象殺す銃受けたけど。流星はSランク武偵だ。

そしてさっきの異様な雰囲気も消えたな。

でも何だったんだ!?あの異様な感じは殺気としか言えないがなぜアリアに対して殺気がでたんのだ?

アイツはここでは結構人格者で人を殺すなんて考えられない。

……………調べてみるか。水のことを。今一度詳しく。

水と研鑽派

水「来るかな〜♪来るかな〜♪」

理子「来るから落ち着いて落ち着いて……………」

だって研鑽派ダイオの主力が皆来るらしいんだ。全員で揃うのは久しぶりだし楽しみだ。

理子「まあ、全員揃うんだししようがないかー……………」

水「にしても何であの二人も来るって言い出したんだ？」

理子「そろそろ見えてきたし自分で聞こうよ」

あ、ホントだ。よく見ると地雷みたいな形の小型な乗り物がきてる。

理子が持っていた懐中電灯をチカチカさせる。モールス信号か何かかな？

そしてたどり着いた二つの乗り物の中からそれぞれ二人ずつ出てきた。

まずは女性陣。

ジャンヌ ダルク

彼女はあの有名なジャンヌダルクの30代目。水の魔法を得意としていて、聖剣

デュランダルが武器。

髪は白く目は青く綺麗だ。性格が少々堅物なのがたまに傷だが。

そして夾竹桃^{きょうちゆうちくとう}。

見た目はとてつもないインドア感。全体的にくらいけどイ ウーきつての毒使いで世界中の毒ならほとんど知ってると思う。まあ、医療に志のある僕からすれば少し微妙な感情になるのだけど……

そして彼女は百合好き、マンガを書くことが好きでコミケで同人誌を発売するほど。僕らの資金はそこから来るからみんなて書くのを手伝う。

さらに霧ヶ峰^{きりがみね}椿^{つばき}。

見た目はまず髪。椿という名の如く赤いロングヘア。どことなくカナ師匠の面影を感じる。背も高い。羨ましい……じゃなくて流石だ。ちなみに小さい(何がとは言っていない)。彼女は武器ならなんでも使える万能なやつ。だが近接は壊滅的。どうしてこんなに偏った。

そして男性陣。

千葉^ち周^ち二^{しゅうじ}。

見た目は少しガサツな感じもあるが普通にイケメン。性格は仲間思い。元武偵強襲科の生徒だが、昔なんかあったとかでイ ウーに所属している。ちなみに彼はくそ強い。武偵で飛び級を推薦されたらしい。まあ、僕もされたしキンジもされた。ということはアリアもじゃね? まあ、きつぱり断ったが。

水「みんながみんな久しぶりすぎ」

周二「そうだな……………元気だったか？」

水「お前、少し上から目線だけど年齢的には後輩だよな？」

ジャンヌ「見た目はお前の方が後輩だ」

研鑽派でも僕のいじりは健在だ。どんだけ見た目が女々しいんだよ僕。

夾竹桃「それにしてもなんで椿に周二も来たの？」

理子「それりこりんも思った。どうかした？」

椿「私は失った記憶を取り戻しに来たの。あなたが言ってた私の弟と思われる人にか
うためにね」

水「椿はそうだと思ってたんだけど周二だよ。お前、兄さんに会うとやばくないのか

？」

周二「……………確かにそうだけど少しだけ顔を見たくなった」

……………まあ、こいつは仲間思いだし心配なのか。分からんでもないな。

水「というか理子。アリアのやつ強かったぞ。僕があんだけ苦戦したのに大丈夫か

？」

理子「楽勝楽勝。アリアなんて楽勝。もう準備万端」

ジャンヌ「なら私を手伝え。私は星伽白雪を帰京次第……………とる」

水「白雪は強いぞ。幼なじみ殺されんのは嫌だけど忠告だ。正面戦闘になったら守りの一手がいい。あいつは炎を使うしな」

ジャンヌは先祖が炎で殺されたことから火を恐れている。白雪とは相性が良くない。椿「なら私はジャンヌを手伝う。それなら大丈夫でしょ。それで夾竹桃は間宮あかりよね。大丈夫？」

夾竹桃「心配なんていらないわ。条件を出してペットにでもしてあげるわ」

周二「いや、お前そういうのはやめとけよ。あと油断禁物な」

夾竹桃「……………わかったわ」

水「……………僕はどうするかなー」

周二「俺もどうしよか……………」

絶賛、男性陣が目的迷子だ。

水「まあ、僕はやっぱり彼女だな……………」

周二「ああ……………やっぱりやるのか。嫌だったんじやねえのか？」

水「嫌だけどやる」

これも目的のためだ。

水「ウルスの生き残り、レキ。僕のライバルをやる」

これが実はこれは割と重要だったりする。

「ウルスの裏切り者一族、白福だしな。やるしかねえ」

水と咲

私がか先輩と会ったのは一年生になる前の中学三年の卒業式だった。

私は東京武偵高付属中学校に通っていてそのまま東京武偵高校に進学したんだ。

出会いは突然……なんて言うけどまさにその通りだったのをよく覚えている。

出会ったのは依頼を同じクラスの友達のリイカとしていた時だった。

リイカは強襲科で好成績を残している武偵でBランクの中学三年という珍しい人材なんだそうさ。私は人材って言葉が嫌いだけど武偵って変な人ばかりだしね。先輩含めて。

ちなみにあだ名は男勝りの性格から男女。私はそのあだ名が本当に許せない。リイカだって女子なんだしそのあだ名は酷すぎる。

あの時は私がドジってリイカが脱出したのに私だけ閉じ込められたんだ。

本来はリイカは目標を捕まえたあと裏口から脱出、私は証拠の回収ということで回収後はすぐに逃げる予定だったのに敵に捕まっちゃって倉庫に閉じ込められてたんだ。

その時、私を捕らえた敵はリイカが倒しそびれたやつなのかそれともリイカはまだ敵と交戦していないのか分からなかった。

携帯も奪われていたので連絡もできず、ただ怖かった。

どれだけ爪をたてても逃げることもできない。手も結び付けられていてまず爪をたてることも出来なかったが。

そんな時だったと思う。先輩は本当に颯爽と現れたんだ。

「なんだよ………密輸者を仕留めとけって師匠に言われたのに誰かが先にやりやがったな………」

その声を聞いた時、武偵校の生徒だと思つてすぐに声を出した。

咲「助けてください!!」

「助けてください………どこからだ!!あと名を名乗つとけ!!」

咲「真田咲!!武偵です!!近くの倉庫に閉じ込められています!!」

「そこだな!!了解した!!」

すると扉の鍵を開けるかと思えば斬り裂いて破つてきた。

透き通るような………まさに水のような色の目は暗い倉庫でも光っているように見えました。髪も水のように何となくかっこいいけど背も低いし私より幼く見えて可愛くもありました。

「お前か。脱出でもしそびれたか?全く困つた武偵だな………」

見た目に反して口調はかなり大人びていて明らかに後輩にしか見えなかったので少

しイラツとききました。私は中学三年にしては背が低いのでそれより低い彼は後輩だと思いました。

「白福水……東京武偵高校一年だ」

その言葉を聞いた時かなり驚いた。

どう見ても140cmくらいしかない背の先輩なんているの？

咲「えつと……先輩ですか？」

水「お前、中学三年だろ？聞いたことある。真田咲って戦闘も出来て治療もできるいやつだつて」

私は初めて自分が有名なんだって思って少し照れた。

水「何照れてんだ？お前が有名なんじゃなくて僕の知識が豊富なんだ」
少しガツクリした。

水「ガツカリすんなよ。僕はそれでもいいと思う。よしっ!!手動かせるだろ？」
先輩はニコツと笑ってそう言った。

ハツとすると手はいつの間にか自由になっていた。

私はその手際よき、そしてそのことを全く悟らせなかった。
それだけでわかった。この先輩はただ者じゃない。

ライカと合流し、武偵に帰ったあと、先輩のことをすぐに調べた。すると予想通りすぐに情報は出てきた。

白福水 狙撃科Sランクの高校一年。

依頼の成功率がほぼ100%。狙撃科だけど強襲科のSランクほどの実力で魔術までする武装巫。

そして二つ名『アグレッション術集合』

二つ名持ちのSランク高校一年生なんて化け物だ。スゴすぎる。

ライカに聞いてみたら先輩のことを知っていたらしく話してくれた。

ライカ「水先輩だろ？強襲科ではよく『強襲科殺し』なんて言われてたまにフラッと強襲科に来ると強襲科のヤツらに次々決闘を仕掛けて勝ち続ける……見た目があれなだけに下克上狙うやつもいるが私は無理だわー。あれは明らかに強いもん。あのキンジ先輩を軽々倒したって話だし」

キンジ先輩のことは知っていた。

この学校で最も注目されやすい強襲科のSランク。高校一年でSランクのこの先輩もただ者ではない。でもあの先輩はあの先輩でネクラとか昼行灯とかひどいあだ名がある。まあ、あの先輩、気にしてなさそうというか無視してるけど。

ライカ「咲、水先輩のこと気になってるのか？」

咲「え？……うん、まあ」

ライカ「だつたらやめといた方がいい」

その言葉に私は疑問しか出なかった。

ライカ「水先輩はただでさえ変な人しかいないこの学校で異常者って呼ばれてるんだ」

咲「……………なんで？」

ライカ「だつて変だろ？狙撃科なのに強襲科にフラッと来て、決闘を挑む。それで勝つくらい強いのに強襲科は取らないし、口調もコロコロ変わる。見た目も高校一年であるの背の低さ。不思議なことばかりなんだよ。あの先輩。だから自ら近づくのは本当に強い人達だけ。キンジ先輩とかと仲良いらしいけどそこら辺と仲良い時点でやばい。みんな強さを知ってるからいじめはしないけど忌み嫌われてるんだよ。あの先輩」

私はそれを聞いて絶句した。

あの時、先輩は明らかに助けるのが普通と言うかあの時、武偵の仲間だから……ではなくて、ただ好意でしたように見えた。

ライカ「まあ、お前が一度決めたことを曲げない性格なのは知ってるし、判断は任せよ」

私はモヤモヤしたまま自分の所属している救護科アシピュラスの授業を受けながらその事が頭から離れなかった。

でもなんで私はあの先輩のことを気にするんだろう？

……………私はあの先輩が好きとか？

いやいや!!ありえないありえない!!

そんなことばかりで授業もまともに受けられてなかった。

そして放課後。

ライカと帰ろうとしたのだが忘れ物をしたことに気づき教室に戻っていた。

すると教室の中から男子達の声がした。

話を聞くとどうやら気になる女子の話をしているようだ。

「お前、誰だ？」

「俺は咲ちゃんか？ちっこくて可愛いし」

……………
……………

「まあ、一番ないのはあの男女だよなあ。強襲科でもマジで勝てねえし女とは受け取れねえんだよな」

……………イラッ!!

「まあなあ……………そうだよな」

咲「ライカ。あいつら締めてくる」

私の愛用の武器、ヨーヨーを取り出して突撃しようとする。

ライカ「いいんだよ、私は自分でよく分かってるから。にしてもお前はいいよな……………ハハハ……………」

顔を下げて力なく笑っているライカに私は何も言えなかった。

「何してんだ？先輩もませろよ♪気になる女子か？」

聞いたことのある声に私はハッと教室に入っっていった人を見た。

それは間違いなく私が今、一番気になっている先輩、白福水先輩だった。

水「で、さっきまで何言ってたの？」

「あ？いやあく。あの男女はないな……………って」

水「そうかそうか。で、悪口言ってたと」

「そうですよ。あいつと言ったら女に見えないですし、僕達より力も強いし、性格なんて男だし」

水先輩から殺気は全くない。怒ってる様子もない。

水先輩も乗り気なんだと思っってこうなったら水先輩もろともぶっ飛ばしてやろうと思っっていた。

先輩はホワホワ笑いながら言う。

もうどっちかかって言うとう子供みたいだ。

ライカ「あ………ありがとうございます!!」

ライカはガバツと礼をする。

水先輩はそれを見て少し嫌そうな顔をした。

水「謝るな。謝られるほどのこともしてねーよ。ほら、『仲間を信じ、仲間を助けよ』

だろ?」

ライカ「え………はい!!」

この先輩はやっぱり変わっている、この学校では。

水先輩は優しすぎるんだ。この変人しかない学校では考えられないほどに。何かの悪口を聞いたり、困っていたり助けを求める人がいるとどうしても助けたくなる。多分、そんな先輩なんだ。

確かに異常者だ。一般人でもそんな人はそう居ない。

でも異常者の意味はいい意味でだ。

水「じゃ、もう帰るぞ。またいつか会おう!!」

先輩は帰ろうと背を向けて歩き出した。

でも少し歩くと止まって「そうだ!!」なんて言って顔だけこっちに向けた。

水「僕はライカも可愛いと思うぜ？」

ライカ「なっ……なんですか先輩!!」

ライカは照れていたが顔は嬉しそうだつた。

それを見ると先輩はニツと嬉しそうに笑つてまた歩き出した。

咲「ライカ!!先に帰つてて!!」

ライカ「え!?……わかつた!!」

私はそうとだけ言つて走り出してしまった。

最後に見せた、あの笑顔は確かに何かを押し殺しているように見えた。助けを求めた。

理不尽だ。あんなに人のことしか思つてないのに人に嫌われているなんて。可哀想で仕方なかつた。

そして憧れた。嫌われているのにそれでも助けることをやめない。そんな先輩に憧れたんだ。

多分、初めて助けてもらったあとにモヤモヤしていたのは先輩の優しさをあるとき感じたからだと今はわかつた。あるとき、先輩は一度も脱出しそびれた私を責めなかつた。普通の武偵の生徒なら少しは責めたりするだろう。でもあの先輩はむしろ潔く助けてくれたんだ。

だから私はモヤモヤして止まなかつたんだ。

先輩の後ろ姿を見つけて、呼び止めた。

咲「先輩!!」

すると先輩はさつきと同じように顔をこちらに向けなかった。

水「なんだよ……………」

不機嫌な声をしていた。

咲「先輩つて優しいんですね」

水「人に優しくするのは当たり前だろ?」

咲「当たり前つて難しいですよ」

水「で、それだけか? 眠いんだが……………」

咲「……………なんで人にそこまで優しくできるんですか?」

水「なんでお前は僕がすごい的な言い方するんだ?」

先輩は明らかに少し怒った声をあげた。

その怒気はなぜか鬼のように恐ろしかった。

咲「凄いやないですか」

水「何がだよ。結局、こんなことしても周りの評価は異常者なんだよ!!」

先輩は何かを吐き出すように叫んだ。

その声は怒気を含んでいたけど震えていた。

咲「……………先輩、泣いてるんですか？」

水「うっ……………泣いてねえし」

いや、泣いてる。声が泣いてる時の声だ。

咲「無茶しなくてもいいじゃないですか。なんで抱え込んでるんですか？」

水「……………だって周りには関係ないだろ？」

咲「関係ありますよ!!」

水「根拠は？」

咲「うっ……………」

この先輩は子供みたいな回答をしてきた。

でも言い返せない。確かに私は先輩から見れば部外者だ。

咲「……………じゃあ、関係あるようにしましょう」

水「……………は？」

咲「先輩!!私を戦妹アミカにしてください!!」

先輩は驚いたかのようにこちらに顔だけ向けた。

その目は少し赤い。やっぱり泣いてたんだらう。

水「いや、意味わかってる？」

咲「はい!!先輩はいい人ですから!!」

水「……………お前は優しすぎだ」

咲「先輩程じゃないです」

水「……………俺の戦妹アミカなんて嫌われるぞ?」

咲「私は先輩がいいんです」

先輩はその言葉に少し赤くなって顔を下げた。

咲「先輩は誰より優しいです。だから私の憧れの先輩です。それに先輩がこんなに助けを求めているのに心配しないのがおかしいです」

その言葉を聞いたら先輩は少しだけ涙を目に溜めて顔をあげた。

水「……………やっぱりお前は優しすぎだ」

咲「だから先輩程じゃないですって」

水「……………ひとつ言うけど僕は厳しいよ?」

咲「問題ないです!!」

水「……………ついてこい」

先輩はその言葉を言っただけでまた歩き出した。

私はその小さな背を追いかけた。

後日、それを見ていたら面白いライカにかわかわれた。

先輩にその事を話すと笑って次は鍵とエンブレムを渡してきた。鍵はいわゆる合鍵らしい。エンブレムは戦妹^{アミカ}の証みたいなものだ。

水「これでお前は正式に僕の戦妹^{アミカ}だ!!」

咲「周りが見れば先輩の方が戦弟^{アミコ}ですけどね」

水「うるせえ!!」

これが私と先輩の出会いの物語だ。

水と二人

この前、周二と椿が言っていた兄弟くん。

その二人の下調べをとのことで会ってきたくしいとのことだ。

椿はともかく周二は諸事情で会うことが出来ないし、彼らは僕と同級生だし会うのは簡単だ。

水「周一くくん？げ☆ん☆き☆で☆す☆？」

「……………お前か」

彼こそ周二の兄さん、千葉周しゅういち一。

2年B組の鑑識科Aランク。

物静かであり素性を明かそうとはしない……が仲間思いなタイプ。観察力が優れているということ以外は全て平凡なスペックであり裏方を担当している様な人物。

まあ、ウチの情報泥棒ことりこりんが彼の裏のことを調べることに成功している。

実は彼、強襲科でS、もしくはRを取れるほどの実力を持った超戦闘特化型武偵。

その事を知って、昔勝負を挑んだが受けてくれなかった。やっぱり昔のことがあって戦いは避けてるのかな？

周一「早く帰りたいんだが」

水「しるるか!! こんにやる!!」

周一「……………はあ……………困ったやつだ」

困ったやつ扱いされてるが気にしないでおこう。

「何してるの?」

お、手間が省けた。

彼は霧ヶ峰柳。やなぎ

2年B組強襲科Aランク、

自由奔放かつマイペースな性格で他人からの評価を全く気にしないタイプ。近接格闘とハンドガンの扱いは得意だがA RやS R、S G等の扱いが壊滅的。お前ら姉弟まとめてなんでそうなったんだよ、僕に教えてくれ!!

水「柳〜。周一が、冷たい〜」

柳「それは君がウザイだけだと思うな〜」

水「このやろー!! 死ね!!」

柳「ここぞとばかりに強襲科の本能を解き放つな!!」

周一「まずこいつ強襲科じゃねえだろ」

こんなんだが仲が悪い訳ではない。

これはまだまだ武偵^{ぶてい}では静かな方だ。

ドンドン撃つたり、死ぬ死ぬの連発だったりやばいんだ。やばいんだ（大事なことなので二回言った）

「お前ら何やってんだ……」

毎日のように聞くネクラボイス（新しい単語）に三人同時に固まった。

水「キンジこそ何してんのさ」

遠山キンジ。

こいつはこいつでこんなんだけど凄いやつだからな。

まあ、恐らく理子のバスジャックに巻き込まれて帰ってきた感じだろう。電話で聞いた話、アリアを1発撃つことは出来たそうだ。理子め、やりおる。

というか、ここにいる四人は全員がとんでもないやつ。

特に柳以外は飛び級だのSランクの上のRランク候補だの……

あ、Sランクがひとつの軍隊と同等の力を持つ強さだがRランクはそれを超えるもの。超人だ。

日本にも一人いるらしい。国の主要人物の護衛などのとんでもない任務がドンドン飛び込む化け物だ。

しかし僕が思う化け物は違うけどな。

イウーのNO1 プロフェシオン 教授

あいつはチーターだ。いわゆるイウーの奴らが持つ技術の集合体。あいつは世界最強だ。確実に僕を殺せる。

師匠も瞬殺とはいかずともすぐにやられるだろうな…………

その夜、久しぶりに師匠に電話してみた。

水「カナ師匠、元気ですか？」

「元気よ、そっちは元気そうね」

彼女……………じゃなかった。

彼はカナ。またの名を遠山金一。

お察しの通りキンジの兄。ヒステリアモードという特殊体質も持っている。しかし師匠は女装をすることで性的興奮を得ることが出来るらしい。

師匠は強い、恐ろしく。

キンジも強いがあいつのヒステリアモードは条件もきつく持続が長くない。師匠は条件も楽で持続可能だ。

カナ「今度、研鑽派で派手なことやるんでしょ？準備は？」

水「だいじょーぶ!!レキをやるために周一を雇ってるのだ!!」

カナ「……………彼なら安心ね。わかったわ。それじゃ、近いうちに会うわ」

水「……………どういうこと？」

カナ「私はそのうち、アリアを倒しにそっちに行くわ。最後にだけど……………気を付けなさい。あなたの正体は恐らくバレる。またはもうバレてるわ。そしてライファイにも気をつけなさい」

水「誰に？」

カナ「レキ、と……………私の弟」

水「……………了解。命にも気をつけとく」

カナ「それじゃあね」

水「はくい」

……………レキはまだしもキンジか。

あいつはやはり気をつけるか……………

……………

「動くなよ。俺の話を聞いてくれ」

俺、遠山キンジは今、頭に銃を突きつけられている。

キンジ「まずお前は誰だ」

「俺はライファイアーエンドなんて呼ばれてる」

キンジ「ライファイアー………エンド？」

ライファイアー「命と地、ライファイアー終わり。すなわち、命と大地を終わらせる者。まあ、長いから

ライファイアーと呼べ」

キンジ「なんのつもりだ？」

ライファイアー「なに、俺は情報を持ってきたんだよ」

俺は今、後ろから銃を突きつけられているため、相手の姿が見えない。

キンジ「お前なんか………」

ライファイアー「気にならないか？白福水のこと」

キンジ「………」

俺は黙るしかない。

水のことを気にならないと言われれば嘘になる。

ライファイアー「あいつはレキと同じ、ウルスの生き残りさ」

キンジ「………ウルス？」

ライファイアー「知らないか。まあ、いい。ならこの言葉は知ってるか？色金」

キンジ「色金？」

ライファイアー「まじかこれも知らないのかよ。色金つてのは簡単に言えばとんでもない

パワーの込められた金属だ。お前もそのうち詳しくわかる……………で、色金には三種類あつて、緋緋色金、瑠々色金、璃々色金……………」

や……………やばい。

これ絶対、聞かない方がいいヤバイ系な話だ!!

ライファイ「それぞれに神がおり、性格も異なる。色金と長いこと持っていたり近くにあると髪や目の色が変わったりと変化が起きる……………丁度、水のようにな」

キンジ「……………まさかだが……………」

ライファイ「そのままかさ。水は色金と深く関係を持つ。というか今も色金は彼の胸に存在している」

キンジ「……………なんでそんなこと教える」

ライファイ「ここからは命令だ

……………白福水を殺せ。時間が無い」

な……………なんだと!?

あいつを殺せつてのか!?

ライファイ「そのために俺も既に手下の派遣をしたんだ。わざわざ研鑽派に忍ばせてな」

キンジ「……………どういう事だ!!」

水を殺す!? 流石に友達を殺そうとするやつを見過ごせないな。

素早く後ろにいたライフィーの溝を殴ってやる。

ライフィー「お?」

キンジ「姿くらい見せやがれ!!」

ライフィーがバックステップをしたので後ろを振り向くと彼は意外そうな顔でこちらを見ていた。

ライフィーは片目に眼帯をしており、服装は全身マントで分からない。背は俺より少し低いくらいで恐らくタメだろう。

ライフィー「お前ならわかってくれると思ったが無理か。まあ、いいか。せいぜい楽しめ。何も出来ないお前に絶望しろ」

キンジ「なんだと!!」

ライフィー「だってもう手遅れだもんな」

キンジ「……………まさか!!」

水「お前らあ!!」

不意打ち

僕が一番苦手とする戦法だ。どれだけ技があつて、像を殺す銃の威力を殺す方法が

あってもこの戦法だけは防げない。僕は打たれ弱いという弱点がある。

しかしよりにもよってなんでこいつらに裏切られんだよ!!

「命を刈り取る形をしているだろう?」

水「周二!! 椿!!」

これは僕が命を賭けて、守りたいものを守り、自分の運命のために戦う話だ。ストーリー

ライファイエンドと璃々神

水「なんだよお前ら!!」

周二「すまねえな。お前を殺るのが俺たちの任務なんだ」

水「話になんねえ!! 誰から命令された!!」

椿「あなたの命を狙うやつなんてライファイくらいでしょ? いい加減理解しなさいよ」

水の心には怒りというより絶望が湧いていた。

水「信じてたのに……………お前らを……………」

周二「俺も仲間を殺るのは心が痛むよ」

椿「あなたの弱点は仲間思いすぎることに。裏切られれば心は崩れるわ」

信じてたのに……………てたのに……………信じて……………

周二「すまねえな。じゃあ、死ね」

水の頭に周二の銃　ワルサーP88を向ける。

これがもし、水じゃなければ詰んでいた。

なぜかっていえば彼は仲間思いすぎるから。

「先輩!!」

ドンツと音がして、周二の銃が壊れる。

「中がうるさいと思って、何かと思えば修羅場じゃないですか……先輩!!何してるんですか!!」

扉をぶち破り、周二の銃をヨーヨーでぶつ壊した真田咲。

周二「水の後輩くんか。一人で何しに来た」

水「………咲!!逃げろ!!」

咲「嫌です!!」

ヨーヨーを地面と水平に飛ばす。

周二「面白い!!」

周二はそれを持っていた日本刀で弾いた。

ヨーヨーはすぐに咲の手元に戻る。

周二「次はこっちからだ!!」

咲「無駄ですよ!!」

ヨーヨーをまた投げ、周二はヨーヨーで防ぐ。

バキッ!!

ヨーヨーは周二の日本刀をへし折った。

周二「くつ……………（手が痺れた!?あれは硬すぎる。正面からは無理だ）」

椿「たくつ……………何してるのよ。こういう奴は手数よ」

椿は低反動の小型マシンガンを持っていたケースから取り出した。

椿「あなたもこいつを相手しすぎたわね」

咲「まだまだですね!!私は手数にも対応出来ますよ!!」

バリバリバリツ!!

マシンガンから発射された弾を一つ一つ弾くことは出来ないが高速回転させれば全部弾ける!!

……………とはいかず、流石に何発かはかすってしまうが要所だけは防ぎ、何とか凌ぐ。

椿「あら?ほんとに強い」

水「……………咲」

咲「先輩はいつも変な人です!!この人達が誰かは知りませんが……………」

「うるせえーな三下」

ぶつ壊されていた扉からまた人が出てくる。

水「……………命!!」

「コラコラ、本名言うんじゃないよ。俺はライファイーエンドだ。ライファイーとでも呼べっていつも言ってるだろ」

ライフィーエンド

本名は夢月命。むげつめい

理由は不明だが僕の中にある色金を狙ってくる。

片目は失明していて眼帯をしている。マントを羽織り、服装は厨二病臭い。

咲「あなたも敵ですか？」

ライフィー「見れば分かるだろ」

咲「なら話は早いです!!」

すぐにヨーヨーを投げるがライフィーは居合斬りで弾き返した。

ライフィー「こんなのお手の物だよ」

咲「……………(速い……………ならこっちで!!)」

ギイン!!

咲は不意打ち用としていつも持っている銃　ワルサーP88を撃ったがそれも斬られた。

ライフィー「ん？」

咲「あなたなんですか!!」

ライフィー「この刀自体が特殊なんだよ」

次の瞬間、ライフィーは消えた。

……いや、消えた訳じゃない。

通り過ぎただけだ。あの一瞬だけ雰囲気消して咲の横を通り過ぎたんだ。

ライファイ「命を刈り取る形をしてるんだ、俺は」

咲の腹ら辺には大きく斬られたあとがあった。

……そう、あれがあいつの恐ろしい所。

あいつの刀、霊鉄剣は抜群の斬れ味を持ち、防刃製の物も貫通する。さらにあの雰囲気消す技術でイ、ウーの中で最も暗殺に長けている。

水「……貴様っ!!」

パタツと倒れた咲を見て、僕は激怒したが体はまだ動かない。

僕があいつが怖いんだ。

昔からずっと付け回してくる、あいつを怖がるのも無理はないと思う。昔なんて言ってるが生まれた時からだ。僕のためにみんなが体をはって、死ぬ。そんなトラウマをあいつは植え付けてきたんだ。

ライファイ「……どうやら終わりかな?」

水「……う」

『な〜にしてるのよ!!』

水「……ふえっ!?!」

気づけば自室ではなく見渡す限り白い空間だった。

水「久しぶりに呼んだな、リリ」

「最近、楽しそうだったから呼ばないでおいたのよ」

彼女は璃々神。僕はリリなんて呼んでるが列記とした神だ。彼女は色金が僕の体の中にあるため、自由に話せるようになった。僕は生まれた時に璃々色金を埋められたから生まれた時から話をしている長い付き合いの神だ。

髪と目は璃々色、細くて少し幼く見える。

リリ「で、また仲間が死にそうだけど」

水「うぐ……………」

するとリリはため息をひとつついて

リリ「あなたそろそろあいつに慣れなさいよ」

水「……………どうやってだよー」

わざとらしく膨れてやるとそのほっぺをリリはバシツと叩いてきた。

水「いたっ!？」

リリ「そんな屁理屈言わない!!あなた、武偵でいたんでしょ!!」

水「そうだけどさー……………」

リリ「というかあの後輩ちゃん!!彼女はあなたを最後まで信じてると思うよ!!裏切ってるのあなたじゃない!!」

水「うっ……………」

リリ「……………覚悟決めて戻りなさい。これ以上、傷つけられたくないんでしょ?」

水「……………リリ」

背を向けて立ち去ろうとしたリリを呼び止めた。

リリ「なに?」

水「僕は今、一番幸せなんだ」

リリ「うんうん」

水「だから力貸してよ。守るから」

リリ「……………へえ。あなたから言うのは初めてね」

水「大事だからね」

リリ「……………了解。身体能力の向上をするわ。あとはあなたの判断しだい」

水「ありがと」

リリ「さあ!!行っただ行っただ!!」

水「了解!!」

ライフィー「ほう、真剣白刃取りか」

水「アリアのパクった」

僕に向けて振ってきた刀を真剣白刃取りで止めた。

ライフィー「……………お前、目と髪の色が……………」

水「ああ、少し緑が混じった感じの色でしょ？璃々色かな？」

ライフィー「……………使ったか」

水「行くぞ!!……………と言うとでも思ったか!!」

まずは咲を抱えて逃げる!!

ライフィー「させるかよ!!」

周二「こっちのセリフ!!」

周二がもうひとつのワルサーP88を撃った。

水「周二!？」

周二「行け!!バカやろー!!」

水「了解!!」

僕は色々気になったが咲を抱えてその場を離れた。

ライフィー「どういうつもりだ？」

周二「賭けてたんだ。あいつがどう動くか」

椿「そうよ。彼が動ければ助けようって話だったのよ。カナさんから守ってって言われて、あなたに殺せって言われたから間を取って」

ライファイ「……………カナめ。面倒なことをしやがった」

周二「俺も兄に見つかる前にやってしまいたんでな!!」

ライファイ「上等だ!!来いっ!!」

水と咲 ～馬鹿な二人～

水「咲!!大丈夫か!!」

僕は走りながら声をかける。

咲「……………せ……………せんば……………」
「ああ、喋んな!!」……………はい」

傷を見ると結構、深くまで斬られている。このままで明らかに命に関わるぞ!!

水「こうなっていると僕一人じゃどうしようもねえ!!」

とにかく、リリの力を使って癒しをかける。

水「あいつに頼るか。あの後輩なら気にせずやってくれる!!」

走りながら電話をかける。

ガチャ!!

『先輩?先輩からボクに掛けてくるなんて珍しい!!嬉し……………「わあつたから待て!!」』

彼女は禪^{かなぎ}風^{みゆう} 美癒

東京武偵高校衛生科兼狙撃科1年生で衛生科狙撃科共にAランク。

武器はコルトSAA、PGM・ウルティマラティオ・ヘカートII、脇差

白く長い髪をリボンで一本三つ編みにしており、空色の瞳をしていて、確か身長は1

48 cm。幼児体型だが特に気にしてないらしい。長いアホ毛が一本あって左側に星形のヘアピンをつけている。

そんな彼女は僕とレキにいつもついてくるんだけど咲が来てから少しは大人しい。まあ、来る時は来るんだが。

水「急ぎだ!!咲が大怪我したから治療の準備しとけ!!あと10分でいく!!」

『え?咲ちゃんが!』

水「分かったら返事!!」

『は…はい!!』

すぐに電話をきるとスピードを上げて走る。

美癒「あ、先ば………って、咲ちゃん!?生きてるんですか!？」

どうやら美癒の目にも瀕死状態に見えたらしい。

水「辛うじてな!!まだ敵は近くにいます!!せめて止血をある程度しねえと!!」

咲は出血がひどい。このままだと血液不足で死ぬ!!

美癒「止血剤の用意にはまだかかります!!丁度底をついてました!!」

水「取り敢えず止血テープ!!ありったけ!!」

美癒「言われなくてもやりますよ!!」

美癒は手際よくかつ迅速に対応する。

『水!!』

水(何だよ!!リリ!!今忙しいん……『ライフイーがもう来る!!』なに!!)

ヤバい!!思ってたより速かった!!

美癒「先輩?」

水「もう敵が近くまで来てる!!」

美癒「ええ!?ど……どうしたら……」

咲「……私を置いて逃げてください……それなら……」

美癒と二人でうろたえていると咲がそんなことを言い出した。

水「バカ!!人のことより自分のこと心配しろ!!死ぬぞ!!それならここで僕が迎え撃つ

て……」

咲「……先輩……こそ……自分より私の命を……心配してるじゃないですか……」

そんな会話をしていると美癒が突然、笑ってきた。

水「……何だよ」

美癒「二人とも馬鹿だあって」

………ん?どういうこと?

美癒「結局、二人とも自分を大事にしないじゃないですか!!馬鹿ですよ………全く、羨

ましいです」

水「……………ん？」

美癒「どんな時でも大事に思ってくれる人がいて」

水「……………僕にとってはお前も大事だよ」

美癒「……………先輩って、本当に自分のことは考えませんね……………先輩!! 咲ちゃん連れて逃げてください!! そいつはボクで何とかします!!」

美癒は何か覚悟を決めたような顔で言ってきた。

水「ぼっ!? お前あいつは本当に強んだぞ!!」

美癒「先輩のやってることはいつもこんなことですよ?……………心配を感じました!! 咲ちゃんをお願いします!! 行ってください!!」

水「……………死ぬなよ」

美癒「それなら増援を呼んどいてください」

水「了解!!」

僕は再び咲を抱えて走り出した。

「感動的だな……………先輩を助けるなんてな」

そいつはドアをすり抜けて入ってきた。しかし美癒は動じないようにする。

美癒「あなたですか……………」

「ライファイアーエンドだ。ライファイアーとも呼べ」

美癒「ボクは足止めです。相手してくださいね？」

ライファイアー「かわい子ぶつても無駄だ。俺は容赦ないぜ？」

美癒はライファイアーを悪戯な目で見る。

美癒「先輩は強いですから、ボクも負けません」

ライファイアー「そんな幻想捨てちまいな!!」

再び走る。

でも今は抱えている咲が軽い。

……………すなわち、もう瀕死だ。本当に危険だ。

美癒で止められる時間はそう長くない。それなら武偵校のどこに逃げてでも無駄だ。なら、あそこしかないだろう。

咲に色々バレるが命には変えられない。

水「ついた!!」

そこは何でもないただの校舎裏。

でもここにはあるんだ、逃げ場が。

水は持っていたお祓い棒に魔力をそそいで地面を軽く叩く。するとそこに大きなテレポータルができた。

水「咲!! 驚くなよっ……っつて、いつても今は喋んな!!」

僕はテレポータルに入った。

ついたのは近未来的な研究施設。

ここは本来、存在しない場所に空間の歪みを作り、無理矢理秘密基地を作ったんだ。

恐ろしいほどコストはかかるし魔力も消費したがここならイ　ウーの誰にも見つか
らない。

しかもここ、とても広い。

一つの国が大きな研究をする時のような広さ。

この広さにしたことでも入られても僕の場所に辿り着ける確率はかなり低い。

武偵校と繋いである部屋は研究室。

緊急のときにここに入ってすぐに治療するためだ。

水「咲!! もう大丈夫だ!!」

もう咲は本当に軽い。

すぐにベットの上に置いて止血剤をとる。

傷が深いのでこれだけではダメだがもう血を止めるだけすればいい!!

乱暴に止血剤を塗って、僕は武偵手帳を取り出す。

ラッツオ

……いわゆる復活剤。こうなると止血だけじゃどうしようもない。使うしかない。

水「咲!!これだけ答えろ!!アレルギーは?」

咲「……ない……です……」

水「わかった!!使うぞ!!一つ言うがこれはしようがないから許せ!!」

ラッツオは心臓に……すなわち胸に打つ必要がある。

だから一旦、制服を脱がせる必要があるんだ。

咲が下着姿になるのが今は正直、気にならない。

咲の心臓……打つ場所をすぐに見つけて、ラッツオを構える。

水「……ふう……さっさと戻っこい!!」

少し乱暴に……だけどしっかり狙いを定めて咲に突き刺す。

すると咲はすぐにゾンビみたいにぱっと起き上がった。

そのせいで僕の頭にゴツツとぶつかってきた。

水「ぐはあ!?!」

そして思わず吹っ飛ばされた。

ラッツオは興奮剤みたいなものでもあるからどうかと思っただが頭ぶつけたせいでクラクラしててそれどころじゃなさそう。よかったよかった。

水「いててて………咲？」

咲「もう!!先輩!!痛いです!!」

水「起き上がってきたのお前だろ!？」

はあ………とにかく、元気で良かったよ。

咲「………で、ここって………」

水「時空の歪みに作った僕の研究施設だ」

咲「………先輩って何者ですか？」

………言われるのは分かっていたけど少し言うのは嫌だな。

咲「教えたくないならいいですけど………」

水「いや、言うよ。ただし口外はなしだ」

咲「………はい」

美癒「くっ………」

ボクは完全に油断していたんだと思う。

水先輩が止めたのもわかった。

ライファイは確かに強い。

もう手元の武器は全て壊され、残ったのは狙撃銃　ヘカートのみ。

ライファイ「お前も死んでもらおう」

「させないよ!!」

扉を蹴り開けて銃を乱射する。

ライファイ「誰だ!？」

「間に合った……………千葉周一だ」

美癒「周一先輩!!」

鑑識科Aランク二年の先輩、千葉周一……………本来は強襲科向きの戦闘特化だと水先輩に聞いたことがある。

周一「間に合ってよかった……………」

「あ……………」

周一「ん?……………あ……………」

……………そしてもう一人……………誰だ?

ん……………周一先輩に似てる?

「なんでいるんだよ!!」

美癒「えつと……………どういうこと?」

周一「おい!!周二!!事情を聞きたいところだがまず殴らせろ!!」

周二「ちよつ?!?待って待って待って!!謝るから!!」

美癒「えつと……………周二さん?あなたは……………」

ボクは状況が飲み込めず顔をしかめる。

ライフィーも同じく顔をしかめている。

周一「こいつは千葉周二!!俺の弟だ!!」

美癒「ええ!?居たんですか!」

周二「……………まあ、色々あつたからな……………」

うくん……………理由は直接あとで聞くとしよう。

ライフィー「よくわかんないがまあ、いい。どっちも終わらせればいいんだ」

周一「……………はあ……………周二、話と殴るのはあとだ。行くぞ」

周二「……………了解。あと殴るな」

美癒「こんな時に喧嘩しないでください!!行きますよ!!」

水「……………というわけなんだ」

僕はイ ウーのこと、璃々金のこと、ウルスのこと、そして僕の一族がその裏切り者

だということも言った。

詳しいことは言えなかったがある程度は言った。

咲「……………先輩って、どこでも先輩ですね、人のことしか考えてない……………」

水「だよなー……………よく言われる」

ちなみに理子がイ ウーであることだけは言っていない。そこは個人情報だしな。

咲「先輩、ライファイーに勝つことは出来ますか？」

水「……………わからん」

咲「……………そうですか……………」

確かに武偵に来てから僕は強くなったがやはり勝てるかまでは分からない。

水「大丈夫、お前のためにも勝つき」

咲「信じてますよ、先輩」

再び戦いが始まる……………

美癒と千葉兄弟

ライフイー（3対1……面倒くさいな）

ライフイーの強さは確かに天下一品。でも周一、周二も弱くはないし、美癒も強いことは今までの戦闘でよく分かっていた。

ライフイー（しかし一番気をつけるやつは美癒だ）

戦闘の経験の多いライフイーだからわかった事だが彼女はおそらく超能力者^ス基本的な刃で戦うライフイーには超能力者^スは天敵なのだ。

しかもここじや本気も出しづらい……仕方ない、引くか。

ライフイー「じゃあな」

ライフイーは気配を薄くして消えていく……

美癒「待ちなさい!!」

周二「やめろ!!ここは逃がすぞ」

周二の言葉に美癒は顔をしかめて

美癒「なんでですか!!」

周二「今の俺たちに勝てる相手じゃない」

ライフィー「懸命な判断だ……さらば!!」

ライフィーはその言葉を最後に完全に気配が消えた。

周二「逃げたな……よかった」

周一「うん、そんなことよりな……」

周二「あ……」

周一「どこいつてたばか野郎!!」

周二「にげろお!!」

今、敵が居なくなっただころなのに追いかけてこを始めた二人を見て美癒は

美癒「……はあ」

とため息をするのだった。

水「それであいつは逃げたと……」

美癒「はい、もうどこに行っただか分かりませんが……また戦いを挑んでくるとボクは思います」

その後、ボクは咲ちゃんと水先輩と合流し、ライフィーのことを話した。

美癒「先輩……あと周一先輩とその弟のことは……」

水「あいつらまだ追いかけてっしてんのか？」

あの後、周一先輩とその弟の周二さんはずっと追いかけて続いている。もうどこに行つたのやら……………

咲「とりあえず良かったです!!」

水「しかしライフイーはなんで引いたんだ……………周一と周二はライフイーの敵でもない……………となると美癒? いやしかし……………」

美癒「先輩?」

水「なんでもない!!」

今の顔は何かを考えている時の深刻な顔だったが気にしないでおう。

美癒「で、先輩。ボクは色々聞きたいことがあるんだけど?」

水「うぐつ……………」

先輩は痛いところを付かれたような顔をした。

美癒「先輩!! ボクは咲ちゃんみたいに甘くないですよ!!」

水「ですよね……………わかった。話すよ」

咲「先輩?! いいんですか!?!」

水「来い、ここじゃ話づらい」

僕は美癒もあの研究施設に連れていった。

武偵校の中だといつどこ話を聞かれているかわかったもんじやない。

にしてもリリの力を使って結果を全く得られなかったとは……………無念……………

にしても一番、気になるのは美癒の事だ。

ライフィーはそう簡単に引くやつではなくしつこいやつなんだ。

しかもかなりの鋭い勘の持ち主で逃げる時に本当に相手が不利な相手と判断した時しか逃げない。

そしてその不利な相手は知っている限り一つ……………

超能力者^{ステルス}

一対一の時、刀一本で戦うあいつは敵の動きを予測するために前半は少しダメージを受ける傾向にあるが、超能力者は多くの技を持つことが多く、敵の動きの予測は難しくしかも一撃一撃がかなり重く、短期決戦を仕掛けられる。暗殺にしても気配を消しても察知できるため、あいつは本当に苦手だ。

それが僕をいつまでも捕まえられない理由でもある。

となれば美癒も……………

美癒「先輩？」

水「ん？ごめん、考え事してた」

美癒「で、ここどこなんです？」

水「それも含めて全部説明する」

少年説明中

美癒「そうなんですか……」

水「そうなんです」

咲「そうらしいんです」

僕は咲に話したことを美癒にも全部話した。

美癒は驚く様子を見せたが次に出た言葉はこうだった。

美癒「先輩ってどこでも先輩ですね」

水「あれ？なんかデジャブ」

全く同じことを言われたのだった。

一旦、武偵校に戻るとそこでは周一と周二が仲直りして待っていた。そして理子が話があるということで理子の部屋に5人で向かった。

美癒「理子先輩もその……なんちやらの一員なんですか？」

理子「そーだよおー……なんちやらじやなくてイウーだけどね」

水「こう見えて理子も強いっっちゃ強いからな」

理子「こう見えてとはなんだあ!!トオ!!」

理子が僕の後ろにまわって来たので軽く後ろ蹴りを入れてやった。

「グハア!!」と言って倒れる理子を咲は心配し、美癒は憐れむ目で見ていた。

理子の部屋に着くと予想通り、ジャンヌに夾竹桃、椿の研鑽派が集まっていた。

ジャンヌ「来たな……では、これよりイウー研鑽派のライフィー対策会議を始める

!!」

キリツとして言ってるが要するにライフィーをどうするか……という訳だ。

夾竹桃「ライフィーはまず攻めてくるのかしらね」

水「知らん。ただ簡単に諦める奴じゃないし……」

椿「攻めてくると思った方がいいわね」

理子「とすれば……こっちから攻めちゃえばいいんだ!!」

周二「そうだな……そうする方が合理的……か」

素早く話を進めていく研鑽派に対して周一、咲、美癒はついていけない様子だ。

水「要するにあいつの居場所が必要だな」

周二「となれば……そうだ!!こっちに忍者いるって言ってただろ?」

咲「……もしかして陽菜ちゃんのことですか?」

美癒「先輩の周りで忍者と言えば陽菜ちゃんだね!!」

水「風魔………か。いい案だな」

理子「私から頼んどくよ。それで私も手伝う」

ジャンヌ「それで行くか………しかし次はどう攻める」

水「全員で行くのは危険だし………」

周一「………いや、全員で行こう」

ここでやつと周一が口を開いた。

周一「お前、どうせ一人で行こうとか思ってたんだろ？」

水「うぐっ………」

凶星だ。

みんなにこれ以上迷惑かけられない。

周一「それはダメだぞ。ここまで来た以上、見逃せない」

椿「そうね………みんなで行きましょうか!!」

咲「もちろん私も行きます!!」

美癒「ボクも!!」

水「お前らなあ………」

その声に少し呆れる。

ライフィー相手に挑んでみんな死にかけたというのになんで行こうとするのだろうか

か。

理子「あー!!水!!それは自分のことしか考えてない顔だあ!!」

水「お前は人の考えを読むな」

ジャンヌ「水、一つだけ言うがこれはいつもお前がしている事じゃないか」

その言葉に思わず首を傾げてしまう。

夾竹桃「……………水はいつでも人のために動くから、たまには私たちにも動かさせて」

水「……………うわあ、確かに」

納得してしまった。

夾竹桃「たまには仲間の話を描くのもいいかも……………」

咲「何言ってるんですか?」

「「「珍しい……………」」」

研鑽派は全員で口を合わせて言った。

夾竹桃「……………」

周一「なんか楽しそうな奴らだな」

咲「はい!!悪い人たちじゃないですね!!」

美癒「うくん……………多分、悪い人たちだよ」

周一「……………どういうことだ?」

美癒「確かに悪い事をする人たちだと思うよ。だけどそれも優しい先輩に影響されて、こうなってるんだとボクは思うんです」

周一「……………だな」

咲「そうだね」

水「なあゝに三人で話してんだ？」

「「なんでもない（です）」」

水「お……………おう」

ジャンヌ「作戦は決まった!!とりあえず私達はここに潜伏するから理子で情報集めを頼む!!水はとりあえず動くな」

水「……………了解」

咲「私たちが下手に動かないように見えます」

美癒「ボクも」

周二「なら安心だ。俺は一旦、兄さんと話があるんでな」

周一「ということとで一旦、実家帰りだ」

椿「私は……………柳とやらに会いに行くわ」

水「その時は咲に同伴させよう。案内してやれ」

咲「はい!!」

なんだかんだで三人も馴染んできたらしく話はすぐに決まり終わった。

というわけで僕はしばらく寮に閉じ込められることになった。

授業を受けに行けるような状況じゃないのでしばらくはサボりだ。まあ、学力も単位も問題ないし大丈夫大丈夫。

ちなみに毎日交代で見張りがつくらしい。

いや、みんな信用しなさすぎ……

『いや、あなたみんなに何かあつたら突撃するでしょ……』

水「おわつつ?!リリ!?唐突なんだよ!!」

『ふふふ……武偵なら油断するな!!少年くん!!』

水「てめえ……もう高校生だぞ……少年言うな……!!」

美癒「先輩は充分、少年ですよ」

水「わあっ!?!」

次は美癒に突然、話しかけられてびっくりしてしまった。

美癒「そういう反応が少年っぽいんです」

水「お……おう」

『ほら!!後輩にも言われてるよ』

水「リリ、後で覚えとけ」

美癒「……………一人で話してるようにしか見えないのでなれませんか」

美癒にはリリのことも話しているのだがやっぱり独り言にしか見えないよな

……………それが正常だ。

水「リリ、美癒がいるんだ。後で話そう」

『了解、二人でゆっくりはなして』

水「……………ありがと」

リリが黙って少し奥の方に行った感じがしたので美癒を見た。

水「にしてもよく美癒も力貸してくれたな。ありがとな」

美癒「先輩には返そうとしても返せないですから」

水「……………お前と初めて会った日か……………」

そう……………あの雨の日、レキと僕は美癒に出会ったんだ。

美癒「久しぶりに話しましょうか。あの日のこと」

水と美癒

あれは大雨の日

その事件は突然起きた。

いつものようにバスに乗り、登校する。

周りが騒がしい中、二人ほど存在感があるくせして周りと話さない二人がいた。

それが水先輩とレキ先輩なのはみんなが知っていた。

水先輩もレキ先輩もこの時点でSランクの最強武偵。しかしその性格ゆえにあまり人が寄ってこない。

美癒「にしても今日は災難だなあ」

外を見るとそれは類を見ない程の大雨。

外に出ればびつしよりになりそうだし、風も強く、吹き飛ばされそうだ。

美癒「しかもみんないないし……」

さらに今日はバスの中に友達も居らず、話す人がいない。

そんな雨の日はとても視界が悪く、風も強いので狙撃には向かない。

しかしそいつは正確に……………

「グアツ」

運転手の心臓を撃ち抜いた。

「バスが!？」

突然、バスが大きく傾き、ビルの壁に激突して止まった。

「おい!!運転手が!!」

「撃たれてる!？」

「でも撃てる距離に人影が……………」

「狙撃だよ」

そこで声を上げたのは水先輩。

「この雨の中で狙撃なんて!!無理に決まってるでしょ!!何言ってるんだ水!!」

高三の先輩が言う。

もう完全にプロの風格がある先輩に対し、水は更にプロの風格を見せながら

水「先輩!! 見えなかったのか!! 遠くのパイルで光があった!! マズルフラッシュだ!!」

「おいおい。お前が俺と同じ狙撃科のSランクだからつてこの距離を撃つやつは信用出来ないぞ!!」

レキ「いいえ、水さんのことは正しいです。私にも見えました。あれは……恐らくM700」

「なわけあるか!!」

水「……っ!! 伏せろ!!」

次の瞬間、その先輩目掛けて弾丸が飛んでくるのが見えた。

到底間に合わないと思ったが水先輩は強靱な反応速度で先輩を押し倒した。

水「先輩!! すいません!!」

「いや、こっちもすまん!! 確かにマズルフラッシュが見えた!! 距離は多分……1000m っつてところだな!!」

水「みんな!! このままバスが止まってればやばい!! バスはまだ動くのか!! おいバカの

武藤さつき居ただろ!!」

「誰が馬鹿だ!! 轢いてやる!!」

そんなことを言いつつ、その先輩、武藤先輩はバスの運転席に行く。

水「おい!!誰か救護科か衛生科!!」

美癒「あつ!!はい!!」

私は衛生科だったので手を挙げる。

水「この運転手を後ろまで運んで治療!!まだ生きてる!!」

そう言いつつ、先輩は救急箱をバックからだし、投げてきた。

美癒「分かりました!!」

武藤「水!!これまだ動くぞ!!打ちどころが良かったみたいだな!!」

水「了解!!武藤!!一旦、ここを離れるぞ!!」

あと、このバスは人数が多すぎる!!今からできる限りスピード出すから運転手と衛生科の……美癒だな!!と武藤!!あと俺とレキだけ残る!!」

「おい待て!!バスに乗ってた方がいいだろ!!ここに残れば確実に撃たれる!!」

水「自分の身は自分で守れ!!このまま逃げても思うつぼだ!!気配がする!!恐らく待ち伏せ!!」

「……………なんだと」

水「先輩!!頼むから!!連絡はよろしくな!!流星に狙撃の正確さは微妙みたいだ!!だからこのビルの方が安全だ!!……………頼む」

そこで先輩は頭を下げる。

「……………信じていいんだな」

水「信じろ、先輩。僕は嘘をつかない」

「……………みんな!!降りろ!!」

『はい!!』

先輩が先導してみんなが降りる。

水「武藤!!美癒!!地獄まで付き合え!!」

美癒「運転手は降ろさないんですか?」

水「出血が酷い。下手に動かせる状況じゃない。それに流石に三人じゃ戦力も問題だ。頼りにしてるぞ!!」

レキ「……………!!」

レキ先輩は無言のまま、狙撃。

すると飛んできた弾丸がギリギリのところまで弾丸で弾かれた。

水「ナイスレキ!!」

レキ「……………(コクリ)」

無言で頷くレキ先輩。

そこで武藤が声を荒らげる。

武藤「そろそろ行くぞ!!」

武藤先輩がバスをバツクさせて、高速発進させる。

水「……………ここからは狙撃出来ない……………武藤!!この先!!近接特価の奴がいる!!」

美癒「……………さつきからなんで分かるんですか?」

水「気配!!」

美癒「ええ……………」

先輩の言葉に内心、ガツクリしたが何故か信用できるのはなぜだろうか。

そんな中、バスは直線の道に出る。

レキ「……………いました。この先に……………」

水「ああ、僕にも見えた」

武藤「とりあえずとばすぞ!!」

水「乗り込まれたら厄介だ!!頼む!!」

武藤先輩が本気でかつ飛ばす。

それによってバスが思いつき風を受けて窓ガラスが割れる。

水「レキ!!狙撃!!」

レキ「私は一発の弾丸……………」ターン!!

レキ先輩が見える距離に来ていた敵……………ツインテールで中国人のような服を着た、

それを撃った。

しかしそのツインテールは神がかった速さでそれを回避しバスの窓ガラスを破り、侵入してきた。

「アイヤ!! やつと乗れたネ」

水「名を名乗れ」

水先輩は腰にかけた鞘に二本の刀を収める。

レキ先輩も狙撃銃、ドラグノフの先に短剣を付けて独特の構えをする。

私も武器のホルトSAAを構える。

「私、ココネ。水。やつと見つけたヨ」

水「僕にようか？」

ココ「その前にちよつと手合わせネ!!」

そのココとやはら柳葉刀を取り出した。

水「……骨まで砕く気かよお前」

ココ「お前はこの程度じゃ死なないネ」

レキ「よく分かっていますね」

水「おい」

なぜかこんな時にコントのような会話をする2人に呆れる。

ココ「行くネ!!」

水「まずはその片言どうにかしろ!!」

水先輩はそうやって叫ぶながら居合斬り。

ココはそれに対して物凄い反応速度で防いだ。

水「やるじゃん」

ココ「キヒツ!!」

ココは刀を振り回すように攻撃してくる。

水先輩はそれを軽々と回避する。

ココ「その反応速度、厄介ネ」

水「お前も凄かっただろ!!」

レキ「……………あと一人来ます」

それを聞いてハツとするとココが破った窓ガラスからもう一人が入ってきた。

ココ「……………来たネ」

「またせたようだね」

そいつはスーツ姿というストイックな服装のイケメン。

しかしそこからは明らかに普通じゃないオーラがある。

水「誰だ……………」

「ここに名乗るような名前じゃない。ただ周りからは教プロフェッショナル授なんて呼ばれてるね」

水「大層な名前だ……全く……とりあえず敵なんだな!!」

水先輩はその男に対し、とんでももない速度で突撃する。

そして刀を振りかざし……

「動きの一つ一つが単純すぎる」

水「……………なっ」

そいつは二本の刀を両手の指で一本ずつ止めていた。

レキ「私は一発の弾丸!!」パーン!!

レキ先輩がドラグノフで一発撃つ……しかしその弾丸は何故か男に当たらない。

水「なんだと……………」

「まずは君からだ」

そして男は水先輩に対してただ殴った。

そう殴っただけなんだ。

しかし水先輩は私の横を通り過ぎレキ先輩に激突した。

ハツとして後ろを見ると……………水先輩は頭から血を流し気絶している。レキ先輩も気絶はしていないものの骨でも折ったのか立ち上がれない。

武藤 「なんだてめえ!!」

「君に用はない。無駄な命は捨てないことだ」

暴れだそうとする武藤先輩に対し、ココが首に刀を置いて止める。

「彼の身柄をしばらく預からせてもらおう」

そう言つて……………男は水先輩を担ごうと近づいた。

私が止めないといけない……………!!

でもその男の圧力に……………足が動かない……………!!

男が水先輩に手をかけようとする。

待つて……………先輩を……………連れていくな!!

しかし次の瞬間、先輩が男の顔を両足で蹴り飛ばした。

……………気絶していた。あの時は明らかに。

しかし先輩はあれほどの衝撃を受けて、数十秒で起き上がった。並のことじゃない。

水「てめえ……………に……………負けられない……………」

「……………まさか僕に一撃くらわせるとは……………」

男はただただ驚いていた。

水「そりやどうも……………俺だって並の人間じゃない自信はあるんでね」

「君は僕の予想を遥かに上回る……………どうしてそんなに強くなれる?」

水「ここには美癒だって武藤だってレキだっている。だから負けられない」

「……………なんとも理解不能だよ」

レキ「……………」

すると男は顔を笑顔にして

「なら一ついい選択肢を作ろう。君が僕についてきてくれれば彼女達は傷つけない」

水「……………わかった。なら行こう」

先輩はノーマルに考えて信じられないほどの速さで返答した。

レキ「水さん……………!!」

水「心配すんな。また帰ってくる」

そうして水先輩はバスを降りていった。

美癒「……………なんだったんですかね……………」

レキ「……………なんで」

美癒「……………先輩?」

レキ「なんで行ってしまおうんですか……………」

その時、レキ先輩が悲しんでいた。

顔を微妙に歪ませて、声も震えていた。

レキ先輩が表情を見せたことに驚いた。

美癒「……………」

思い返せば、水先輩は守るために行ったんだ。

……………なんだか放っておけない先輩だ。

優しすぎて身を滅ぼしてしまいそうな……………

レキ先輩もだ。

感情を持たない訳では無い先輩。気になるし、心配だ。

そして水先輩もレキ先輩も諦めなかった。

私……………じゃなくてボクはそこに憧れたのかもしれない。

その時、不確かだけど確かに先輩達に対して憧れが生まれたのは確かだ。

だからボクは先輩について行くことにした。

ただ、それだけの事だった。

水とライフィー

理子達が情報を集めてくれた。

ライフィーの居場所がハッキリした今、やるべき事は決まっている。

決着を付けよう。

水「装備は大丈夫かな？」

いつもの様に武器を一つ一つ点検する。

特にイロカネシズメ。これがないと困ったことがあるんだ。

咲「先輩……大丈夫なんですか？私達だけで」

美癒「そうですね。ボク達よりみんなに頼んだ方が……」

水「そう言ってるな。あいつらにも仕事があるんだ」

今回、メンバーは僕、咲、美癒に絞った。

イウーのみんなは個々のやるべき事があるし、千葉兄弟は里帰り中だ。

みんなを待ってあげればあいつがこちらが動くこうとしていることを嗅ぎつけて逃げる

に違いない。

行くなら3人しかない。

ライフィーがいるという洞窟。

思っていたより暗く、ライトがないとダメだ。

作戦は二人に話して、美癒は外で待機。

水と咲で外の方に押し出す。

恐らく、ライフィーに正面勝つにはあれが必要だ。

でも正直、使いたくないため切り札にする。

なら、美癒に狙撃で刀を撃ち落としして貰う方がいい。

洞窟はまっすぐであり美癒には武偵弾を渡してある上、暗視スコープをヘカートに付けてきた。

それなら斬る前に刀を撃ち落とせるはずだ。

水「行くか………」

咲「油断はダメですよ」

美癒「………咲ちゃん、先輩!!ボク!!信じてます!!」

行こう、運命を断ち切りに

美癒「あとは待つだけ……………」

ガサツ!!

美癒「ひゃあ!?!」

突然、草むらから音がしたのでボクはびっくりして尻もちをついてしまった。

美癒「つて!!レキ先輩!?!」

レキ（コクリ）

レキ先輩はいつもの様に、無言で洞窟に突撃していった。

美癒「ちよつと!?!レキ先輩!?!せんぱい!!」

ボクは咄嗟に叫んだがそれも虚しくレキ先輩は走り去って行った……………

咲「暗いですね……………」

水「そうだな……………」

ここは洞窟の中。暗いのは当たり前なのだがだからこそ奇襲が怖い。

あの斬撃で首を斬られればそれで終わりだ。

水「とりあえず奥にいくか……………」

咲「……………先輩……………寒いです……………」

……………確かに。洞窟の中とは言えどもさつきから異様に寒い。防寒性のある冬制服を着てきたのだがそれでも凍えそうだ。

水「……………これももしかして魔術か何かかな……………でも魔力を感じないんだよなあ……………」

咲「魔術ではない何かなのかもしれませんね。霊術とか」

水「……………霊術？」

咲「霊術……………自分が死体に宿る霊を仕えて戦うんです。仕える霊の数が純粹に強さになって、多いと自身が一時的に霊になることも出来るとか。この前、壁をすり抜けてきたライファイミみたいに……………」

水「何で言わなかった？」

咲「情報が少なかったからです。でも確信しました。霊は暗く寒い場所を好みます。ここはまさにドンピシヤな条件ですからね」

……………確かにそれなら話を通る。

あいつは気配を消していたのではなくガチで消えていたんだ。

水「何でそんなこと知ってるんだ？」

咲「私は真田一族……………戦った資料がひとつふたつあってもおかしくないですよ」

水「なるほど………」

「でもとなると相手は!!」

もう居る!!

ライフィー「はあっ!!」

咲「読めてますよ!!」

ライフィーの奇襲を咲がヨーヨーでぶん殴ることで止める。

ライフィー「真田一族とは面倒なやつだな」

咲「だからなんですか!!」

水「咲!! 下がれ!! 『水吹き』!!」

ピュツとライフィーに向かって吹くが当たり前のように刀で防がれた。

咲「速い!!」

ライフィー「遅い!!」

咲「だからって負ける気ない!!」

咲はなんと刀を体を思いつきり逸らしてかわし、頭突きをぶち込んだ。

水『秋水』!!」

ライフイー「その技は遠慮したいな!!」

ライフイーは秋水をかわすためにバックステップをする。しかしそこを咲のヨーの一撃が襲う。

あの速度でヨーヨーが当たれば骨が砕け散るはずだ!!

咲「砕ける!!」

すり抜けた。

見間違えではない。ヨーヨーがライフイーをすり抜けた。

咲「霊化!」

ライフイー「終わりだよ!!」

ライフイーは刀を高速で咲に振るう。

水「リリ!!」

『了解!!』

肉体強化をコンマ一秒で行い、ライフイーに突撃する。

この瞬間を待っていた。

こいつはこういう時の僕の動きが分かっている。だから裏をかける!!

水
『不可避の斬撃』

水とライファイアー Part 2

『不可避の斬撃』

師匠の技、不可視の弾丸の斬撃版。そもそも不可視の弾丸とは見えないほどの速さで銃抜き、撃ち、しまう……すなわち早撃ちの究極系だ。

そしてその要領で居合を行う。そうすれば斬撃だつて見えなくてできるのだ。

その速度なら必ずライファイアーも上回れる!!

ザシュツ!!と鈍い音になる。

ライファイアー「ウグアツ!?!」

ライファイアーは驚きも混じった悲鳴を上げる。

咲にも斬撃は見えていないのでポカーンとしてるな。

水「残念だが後輩には手を出させない」

ライファイアー「や……やっつけてくれるな……」

斬ったのは右肩だ。利き手が右なのでこれで刀も使えない。刀さえ使えなくなればこいつも簡単に倒せる。

水「油断したな」

ライファイアー「どうやらそうらしいな……………」

咲を囿にしてしまったがこれで……………終わったな。

ライファイアー「だが油断したがなんだ!!本番はこっからだ!!」

ライファイアーは刀を置き、浮かび上がった。

咲「霊化……………」

ライファイアーは次第に透けていく。

水「なんだこれ……………見たことないぞ……………」

レキ「霊化ですね」

水「うわあっ!?!」

なんか気づいたら隣にレキがいた。

ビックリして尻もちつきそうだったよ。

水「なんでいるんだよ……………」

レキ「彼を止めに来ました」

冷静に吐き捨てるとレキは愛用のドラグノフ狙撃銃を霊化したライファイアーに向ける。

そして引き金を引く。

ライファイアー「当たらねえよ」

しかし予想通りライファイアーをすり抜ける。

レキ「やはりそうですか」

咲「当たり前ですよ!! 霊化してる間は万物を貫通します!!」

水「……………いや、それでも無い」

水は冷静に判断した。

水「こいつは貫通できるものの厚さに限りがあるはずだ」

咲「……………え?」

レキ「気づいてたんですね」

ちよつとした推理だ。

まず厚い場所を抜けられるならこの洞窟の壁を乗り越えてどこからでも飛び出る戦法が有効。だがこの洞窟は何故か不自然に隣にも洞窟に道がある。壁に張り付けば風が吹いている音がしたからわかった。

ということはいつはその隣からさつきも出てきたんだろう。そしてさつき言った戦法を可能にするためにここを拠点としていることが分かる。

まあ、半分勘も混じってるがレキいわく当たってるようだ。良かった良かった。

ライファイ「……………」

水「ならまだ攻略できる」

ライファイ「どうやってだよ」

水「こうやってだよ!!」

水はまるで氷柱のようなものを作り出した。

それは縦に長い。これならライフィーがすり抜けきれないはずだ。

ライフィー「なるほどっ!!」

水『『アイシクル』!!』

大量の氷柱はライフィーに向かっていく。

しかし霊は速さもあるらしくなかなか当たらない。

水「まだまだ!!」

ライフィー「くっ………」

しかしライフィーは少しずつ後退している。

水「当たれえ!!」

ライフィー「当たるかよ!!」

水もライフィーも必死になっている。

水「ならこれでどうだ!!」

水は更に多くの氷柱を出して同時に撃った。

ライフィー「なっ……」

今まですらかわすので精一杯だったんだ。

今度こそ行けるはずだ!!

ライファイ「なんてね」

ライファイは靈化を解除し、右手に持った刀で全部斬った。

水「右手……いつの間に……」

ライファイ「まずはお前だ!!」

ライファイは何故か再生した右手に刀を持ち、レキに向かっていく……

咲「レキ先輩!!」

レキ「……っ!!」

レキも間に合わないかと悟ったのか声にならない声を上げた。

しかしその予想は思いもしないことで外れた。

どこからともなく飛んできたツルがライファイの刀をたたき落としたのだった

……

超能力と超々能力

「追いつきましたよ……先輩……全く……」

水「……やっぱ、お前はそうなのか、美癒」

そこに居たのは……外で待たせておいたはずの美癒だった。

咲「美癒ちゃん……何でここに？」

水「咲、今のツルはアイツがやったんだ」

咲「……え？つてことは……」

美癒「やっぱり先輩には隠しきれてませんでしたか」

やっぱりあの時の推理は当たっていた。

美癒「先輩程ではありませんが、ボクも超能力者なんですよ」

ライフィー「そうだと思っただよ!!」

美癒「吹っ飛んといってください!!」

美癒は再びツルでライフィーを吹き飛ばした。

水「おまけで喰らえ!!」

僕はもう一度、『不可避の斬撃』をライフィーに飛びながら放った。

ライフィー「それは遠慮させてもらおう!!」

しかし、ライフィーはその斬撃をギリギリのところまで止めた。

水「レキ!!美癒!!ここから一旦引け!!」

僕はある理由でこの二人をこの戦場から離れたかった。

美癒「ちよつと!?!何言ってるんですか先輩!!」

レキ「そうですよ」

水「これは僕の事情だから……」

それでも二人は納得していないようだった。

なので……

水「今度何かお願い聞くから!!」

美癒「う……行きましょう、レキ先輩」

レキ「……」コク

レキも無言で頷き退散を始めた。

ライフィー「それで引いちゃうのかよ!?!チヨロインか!?!」

水「はいそんなこと気にしない!!『秋水』!!」

どさくさに紛れて打った秋水をライフィーはすつと交わした。

咲「はあ……先輩はいつでもどこでも先輩ですね……で、私は何も言われなかったの

でまだ居ますよ?」

水「あ……」

咲「忘れてたんです!? 酷くないですか!」

水「うそうそ。あの二人には理由があつて下がつてもらつたんだよ」

咲「理由……?」

まあ、理由は色々あるけど……

水「それは今話すと面倒なんで……」

咲「そうですか……」

ライファイ「そろそろお話は終わったか?」

なんと律儀に待ってくれていたライファイがそう言いながら構えた。

水「そうだな。まずお前をなんとかする!!」

咲「行きます……!!」

再び戦闘が始まると、まず咲が電光石火の速さでライファイに近づいた。

ライファイ「お前の動きはもう見切つてる!!」

ライファイがこれまた凄まじい速さで咲に刀を振るう。

咲「よっ!!」

咲はそれを飛んで交わし、ライファイの頭を一発蹴つて飛び上がった。

ライファイ「なに!？」

咲「まだまだ!!」

咲はそのまま洞窟の天井を蹴って真下に急降下した。

ライファイ「マジか!？」

咲「脳天ぶつ飛ばしますよ!!」

咲はライファイの脳天を狙ってかかと落とすを繰り返した。

しかし、それをライファイは腕をクロスして防いだ。

水「これならどうだ!! 『スプラッシュ』!!」

空中の水蒸気を水滴にして、今までよりとびきり速い速度で放った。

ライファイ「まだまだあ!!」

ライファイは頭上の咲をクロスを解除する勢いで吹き飛ばし、素早く刀で水滴を切り

裂いた。

ライファイ「今度はこっちだ!!」

ライファイは霊力を刀に溜めて、斬撃を飛ばしてきた。

水「飛ぶ斬撃なんざ見慣れてるんだよ!! 『水月輪花』!!」

咲「それ見慣れたらダメなやつです!!」

僕がすぐさま回転させた、イロカネシズメを一本は斬撃を打ち消すために投げ、もう

一方はライファイーに向かって投げた。

そのスキに咲は壁を蹴り、ヨーヨーを回しながらライファイーに突撃する。

ライファイー「はあっ!!」

ライファイーは回転斬りをし、衝撃波を出し、イロカネシズメも咲も吹き飛ばした。しかし、咲は再び壁を蹴り、ライファイーに向かっていく。

ライファイー「なんだよその機動力!!」

咲「ちよつと靴に仕込みをしましてね!!」

ライファイーはサツと咲をかわすが反対の壁を蹴って、咲は再びアタックする。

水『四次元殺法』…』

ライファイーが何度かわしても、咲は壁、地面、天井を蹴って、再び攻撃をする。

咲「当ててみてくださいよ!!」

ライファイー「おもしろえ!!ちよつとばかりやらせてもらおう!!」

ライファイーは咲の来る方向をまるで予想するかのようになにも無い場所を斬った。

咲「おっと」

しかし運悪くそこに咲が飛んでしまい、咲は素早く地面を蹴り、かわし、反撃する。

水「見えないのは斬撃だけじゃねえ!!」

『不可視の弾丸』を僕も連発し、ライファイーに追い打ちをかける。

そして、この間に、目に力を溜めておく。ちよつぴりチートな璃々神さんの技を借りるとしよう。

ライファイ「ちい!! 『靈化』!!」

ライファイがピンチになり、靈化することで、咲も弾丸を回避した。

水「今だつ!!」

靈化して油断して一瞬止まったライファイに向けて、僕は目からライファイの心臓は外すようにレーザービームを放った。

レーザービームはほんの一瞬しかライファイを通らなかつたが、それはしつかりとライファイにヒットした。

ライファイ「なに……………」

レーザービーム。璃々神さんの力であり、光の速さという、まあホントに破格な性能の技。なんでライファイに当たったかって話はまあ、璃々神さんがとんでもなく超次元なんで、靈化程度は貫通できるって話を璃々神さんに聞いていたんだ。

リリ『璃々神さん璃々神さんうるさいなあ!!いつも通りリリでいいのに!!』

まあまあ落ち着け璃々神さん。

リリ『泣くよ!?!』

そんなコントを心の中できながらライファイに近づいてみる。

ライファイ「お前……なんて隠し技持つてんだよ……」

ライファイは狙い通り心臓には外れているが、胸にヒットしていた。

水「今度こそ終わりだぞ」

ライファイ「それは……どうかな!!」

ライファイは咲に向かって、何か不思議な波動を放った。

咲はそれを素早くかわしたが、それを見越すかのようにもう一発波動を放った。二発目は流石にかわせず、それに当たった咲はまるで金縛りを受けたかのように動かなくなった。

ライファイ「こうすればいいんだろ!!」

ライファイは動けなくなっている咲に向かって斬撃を飛ばした……

体が動かなくなったが、五感ハッキリとしている。

しかし声を出すことはできない。

……だから私は、先輩が斬られて倒れる様子を、ただ見ているしかなかった。

思いと決着

水「手加減なしか……」

ライファイ「もちろん」

今、僕の背中を見るに堪えない様なボロボロさだろう。実際、激痛すぎて油断したら意識が飛びそうだ。

水「こういうのはずるいぞ」

ライファイは咲の動きを止めて、攻撃しようとすれば、僕が体を盾にしても守るところを読んでいたんだ。実際、そうしたんだから何も言えないが。

ちなみに後ろではまだ咲が動けないでいる。

ライファイ「でも、俺はそろそろ終わりだろ？あの二人が仲間を読んてくるのは時間の問題。増援が来れば今の俺じゃ、どうしようもない」

水「そうだな……うぐっ……」

やばい。もう立ってるのが限界だ。

リリの力を酷使したこともあり、体力も結構辛くなってきた。

……手を抜くんじゃなかった……

ライフイー「はああ……」

ライフイーが攻撃を仕掛けてくるのを待っていたのだが、ライフイーはバツタリと倒れてしまった。

水「……え？」

ライフイー「今回は俺の負けだよ」

水「……なんだよ」

ライフイー「言った通りだ」

ライフイーは完全に脱力しているが、僕はまだ警戒をして、立っておく。

ライフイー「俺とて、人を傷つけたくはないんだ」

水「……てめえ!!今まで散々しといて何を……」

ライフイー「だが、事実だ」

と言って、ライフイーは再び起き上がった。

ライフイー「お前が許してくれるとは思ってないが……」

するとライフイーは刀を構えて、こつちを向いた。

ライフイー「俺たちらしく、戦いながら話そう」

水「くつ……よくそんな元気あるな……」

と言いつつ、僕もイロカネシズメを構えた。

ライフィー「俺は、お前の璃々色金をお前を殺して取り出すためにやってたんだ!!」
突然の告白に、かなり動揺する。しかし、ライフィーはその動揺を逃さず突撃してくる。

水「どういうことだ!!」

僕は言いながら、ライフィーの刀を防ぐ。

ライフィー「それは危険すぎたんだよ!! 放置してれば、お前はただ苦しいだけだ!!」

水「結論を言えよ!!」

僕は、イロカネシズメを全力でライフィーに叩きつけ、それをライフィーが防いだ。

ライフィー「お前を守るために殺そうとしたんだ!!」

水「めちやくちやかよ!!」

こいつの言ってることはほんとにめちやくちやだ。守るのに殺すってほんとに矛盾だ。

ライフィー「お前がいなければ!! お前の周りには平和が訪れる!! そうだろ!!」

それは否定出来ない。間違いない。僕がいなければ、咲も美癒もレキもこんな戦場に来ることは無かつただろう。

ライフィー「そんな厄災なお前を許せないんだよ!!」

水「言いたいことはわかった!! だけど、お前は結局周りの人を殺した!! 僕よりタチが

悪いぞ!!」

ライファイ「だから言っただろ!! 璃々色金はお前にとって危険すぎた!! お前が辛そうにしているのを見たから、俺は助けようとしたんだよっ!!」

ここまで言われて、やっとわかった。

多分、こいつは力しか教わっていなかったので、苦しんでいる僕を助ける方法も力だけだったんだ。

水「なるほどな!! だったら心配するなよ!!」

ライファイ「何がだよ!!」

水「……今は言えないよ」

ここで僕が手を止めたのでライファイも手を止めた。

ライファイ「どういうことだ」

水「……じゃあ試しに僕を殺してみろよ」

ライファイ「……は?」

すると半分金縛りが解けてきていた咲の顔も少し歪んだように見えた。

水「そうすればとりあえずは分かるさ」

ライファイ「……いいんだな?」

水「うん」

するとライファイの刀がグツサリと僕の心臓に突き刺さった。

咲「せん……ぱい？」

ライファイの刀が先輩に突き刺さると同時に私の身体は動くようになった。
そして先輩はそのまま後ろに倒れて動かなくなった。

ライファイ「これで良かったんだよな」

すぐに先輩に近寄って傷を確認する。

……間違いはない、死んでる。

咲「……なんで」

私は悔しくて涙が零れてきた。

そしてそのままヨーヨーを構えてライファイを睨みつけた。

……と、その時だった。

先輩の身体に異変が起こった。

心臓のある位置から璃々色の光が放たれ、小さな魔法陣ができた。

その魔法陣はゆっくりと回転をはじめた。

すると先輩の周りに散らばっていた血が先輩の傷口に集まって、元に戻り傷が塞がり出した。

咲「……………え？」

ライフィー「おいおいおいおい……………頭痛くなるぞ……………」

ライフィーは何が起こっているか分からないで頭を抱えていた。

私も正直同じ心境だ。

そして遂に傷口が完全に塞がり、破けていた服も再生して……………先輩は立ち上がった。

水「……………ふう」

咲「え……………ええ……………」

ライフィー「お前なんなんだよ……………」

あの時、先輩の心臓は完全に止まっていた。なのにそこから完全に復活したんだ。医学的にも魔術的にも考えられない。

水「まあ、これが璃々色金の真の力なんだよ」

意味わかんない……………

水「璃々色金の能力、タイムコントロール時間操作。僕の体内に璃々色金がある限り、例えば死んでも僕の

身体は死ぬ前に戻る」

咲「それって不老不死ってことですか……………？」

水「まあ……うん」

ええ……じゃあ先輩本物の化け物じゃないですか……

ライフィー「なるほど……な。確かにこりや……俺のやること意味無いな……」

水「そういうことだよ」

するとライフィーはこの場を立ち去ろうとした。

ライフィー「なら……しょうがないな。俺は次のやり方でお前を助けるとしよう」

水「お前ならわかっていると思うけど、外には二人が呼んだ警察や武偵が待っているからな」

あ……そう言えば戦闘前に逃がしたレキ先輩と美癒ちゃんって、そういう理由で……ライフィー「分かっているよ。むしろ捕まるのが狙いだ……また戻ってくるよ」
そうしてライフィーは洞窟の入口方向にゆっくり歩いていった。

咲「……終わったんですかね……」

水「多分ね……」

気づけば水先輩の髪はいつも通りの水色に戻っていた。

水「あ……さっきの能力についてはトップシークレットでお願いね？」

咲「はあ……分かりましたよ……」

水「それだけ、後はよろしく」

咲「……え？」

そして次の瞬間、先輩はその場に倒れていた。

水と雪

あの戦いから数日が経ち、今現在僕は武偵病院に入院中だ。あの後無事に夢月命ことライフィーエンドは捕まり、僕以外は怪我もなく無事だったようだ。

あ、そうそう。他のみんなはと言うと、どうやら理子も夾竹桃も失敗に終わったらしい。まあ、個人的には良かったと思う節もある。しかし面倒なことにアリアとキンジがくつついたということだ。あの二人を同時に相手とかマジ勘弁だやめて欲しい。

まあしゃあない。しばらくは放置といこう。まだジャンヌはまだ何もしてないわけだし。それが終わってからでもいいだろう。

「それで？……」まで無茶した理由つてのを教えてもらって、いいかな？」

水「いやー」

で、さつきから話をしている相手は僕の姉であり、武偵校の強襲科を卒業している白福雪だ。

雪「その力を使わないうって話だったよね？」

水「そーだけどさー……ねえ」

雪「ねえじゃないよ」

ちなみに力というのはリリの力のことだ。実はこの能力はまだ上手く使えなくて使おうと反動でどつと疲れる。なので、慣れるまでは練習以外で使うなって話だったんだけど……

雪「……まあ、いいけどさ。無事だったんだし、ライフイーも諦めてくれたなら」

水「うん……」

雪「にしても……」

お姉ちゃんは癖で顎に手を当てつつ

雪「なーんであんたの能力それについて知ってるやつがいたのかしらね……」

水「そーだね」

これで気づいたかもしれないが僕がイウーに入っているということはお姉ちゃんには秘密だ。お姉ちゃんには武偵校の卒業生、即ちプロなのだ。その弟が犯罪集団の一員だということがバレれば経歴に泥を塗ってしまう。

出来ればそれはしたくない。お姉ちゃんはいつだって全力でやる人だ。頑張ってるお姉ちゃんの邪魔は出来ない。

ちなみにイウー内で僕が色金を持っていることを知ってる人は割と多いので、そこからバレたと予想される。

とりあえず手元にあつたお茶を飲む。

雪「まあ、いいけど。とりあえず私は次の依頼があるから」

水「そ、そうなんだ。前回はイギリスで護衛だっけ？ご苦労さまなことだ」

雪「あんたもいつかやるのよ。んで、今回は前回の依頼人からの頼みでね」

水「ふむふむ」

雪「シャーロック・ホームズを探して欲しいって依頼なのよ」

お茶を吹き掛けた。

水「ゲホツ…またなんでそんな」

雪「私にも分からないわ天才の言うことは」

水「天才とな？」

雪「依頼人からは名前は誰にも言うなって口止めされたのよね」

水「じゃ自分で考えるわ」

するとお姉ちゃんは「そうなるよねえ」という顔をした。

僕は何となく予想があつたのでスマホでその人の画像を探す。

水「でもイギリスでシャーロック・ホームズなんて探す人で天才って言われたら割と

わかりやすいよね。あ、見つけた。この人」

お姉ちゃんはその画像を見ると眉をひそめた。

雪「あたり」

水「メヌエツト・ホームズ。アリアの妹ダネ。シャーロック・ホームズの子孫にしてアリアとは違い推理力の方も引き継いだ天才。車椅子でアリアのように暴れは出来ない」

雪「こそ」

水「まあ、僕らには分からないけど彼女がシャーロック・ホームズが生きっていると推理したわけね」

雪「ええ」

まだ見ぬメヌエツトさん。全くその通りである。

シャーロック・ホームズは生きている。それどころか僕はよく話している。

雪「こんな無茶な任務なかなかないよ……こういう時に限って金一は全く反応ないし……」

水「キンジのお兄ちゃんそんな反応ないの？」

雪「うん、どこいったかも分からないしねえ……」

それも知ってるのがとても心苦しい。

言い忘れていたがお姉ちゃんと金一は同級生で二人でチームだ。正直、東京武偵校を出ていったメンバーの中では一二を争う最強タッグだ。

雪「とりあえず何か分かったら言つてよ」

水「うん、お姉ちゃんありがとう」

雪「じゃ、無茶してくる」

そう言ってお姉ちゃんに窓から飛び降りて言った。大丈夫だろうけど一応外を見てみると通行人がお姉ちゃんが突然降ってきてびっくりしていた。

水「相変わらずだなあ」

本当に忙しくて未だによく分からないお姉ちゃんだ。

水「とりあえず早くこの山を終わらせて、お姉ちゃんを安心させたいな……」

私は気づいていた。

今回の依頼人、メヌエツトことメヌからの推理で弟が、金一が今はイウーにいるということを聞いていた。私はただの推理だと笑ったが、彼女の推理が外れることなんてほとんどないのだ。だとすれば……

雪「考えたくない……な」

メヌは二人がイウーにいる理由までは推理してくれなかった。ただ気まぐれで言わなかっただけかもしれないが。

雪「でも、もし本当だとしたら……」

水は本当に顔に出る。わかりやすい。私も弟と引けず劣らず推理力はある。だから

分かってしまった。メヌは情報不足でわからなかったようだが。

雪「多分、シャーロックは本当に生きてて……イウーにいる」

だとすれば今回の山は簡単なものではなくなる。出来れば協力を誰かに仰ぎたい。

雪「そうだ……」

その時は協力を思いついた。

メヌの姉と金一と弟に頼らせてもらおう。

水と命

今日、僕は久しぶりに蘭豹にマスターズ教務科に呼ばれていた。割と問題児な僕は前はかなりの割合で呼ばれていたのだが最近マスターズはライフィーの件もあつて大人しくしてたから呼ばれることはなかったんだけど……

水「最近は何もしてなかったしなんだろう」

マスターズ教務科は特にめっちゃ怖いとかはないけれど行きたくないのは当たり前だ。行きたいやつとかただのDMだよ。

水「入りますよー」

呼ばれた部屋に着いたのでノックをして入る。

蘭豹「来たな」

水「最近は何もしてない気がするんですけどなんで呼んだんです？」

蘭豹「今日はお前に依頼が届いていてな」

依頼とかめっちゃくちや久しぶりなだけだ。

蘭豹「とりあえず部屋に戻って内容は確認しとけ。ちなみに今回に関しては断ったら撃つからな」

水「ええ……」

わけがわからないよ（・口・、*）

と、言うことで部屋に戻ったわけだけど……

ライフィー「なんだその封筒」

水「……………」

な　　ぜ　　い　　る　　し

ライフィー「実は、今日から武偵校に通うことになった」

水「司法取引……ってやつか。で、どうやって入った？」

まあ、あの時匂わせるような発言してたしな。

ライフィー「針金で開けた。あ、ちなみに今日から俺はライフィーエンドじゃなく

なった。今日からは夢月命……2年B組夢月命だ」

となると白雪と同じ組か……

命「でー、その封筒は？」

水「依頼だつてさ」

命「ふーん……あ、言い忘れてたけど今日からこの部屋に俺は住むからな」

水「ふーん……」

どーせ部屋がたまたま開いてたからだろ。

命「思ってたより反応ないな……というか開けろよそれ」

水「あ、確かに」

と、言うことで封筒を開けてみた。

水「えーつとなになに……イギリスのロンドンへのチケット？」

まず出てきたのは空港のチケットだ。次に英語の直筆だと思われる手紙が入っていた。

水「んー……護衛の依頼見たい。依頼主は……」

と、依頼主の名前を見て凍りついた。

命「おーいどうした。蛇を見たカエルみたいだぞお前」

と、言つて命が手紙を奪つて依頼主を見て、同じく凍りついた。

命「め……メヌエツト・ホームズ!？」

そう、依頼主はこの前、お姉ちゃんに依頼をしていたというメヌエツトさんだった。

命「お……おいやめとけて。色んな意味で嫌な予感しかない」

これは恐らくだけど護衛というより僕に聞きたいことがあるということなんだと思う。

水「やな予感しかないけど……断れないし……」

命「なんつ…でだよ!!」

いいツツコミである。

水「蘭豹に断るなって言われてて……」

命「あー……確かにあの女に言われたなら断りずらいよなあ……」

来たばかりの命でも蘭豹のことは知ってるらしい。

水「……いや、というかこれはチャンスだよ。これを機にききだしたいことがある」
もちろん、色金のことである。シャーロックは色金に興味を持って調べていた。なら、その子孫のメヌエツトさんも何か知っている可能性は……ある。

命「なら……俺も行く」

水「ふーん……へ？」

命「俺も行く。お前1人に任せる訳にはいかないからな」

今まで俺を殺そうとしていた人の言うことだとは思えないな。

命「前にも言ったが俺の目的はお前を守ることだ。次のやり方で守るって言っただろ？」

そういえば言ってたなそんなこと

命「次はお前の相棒として、守ろうと思っててな」

水「いや、勝手に相棒を名乗るなよ。というか今は普通に話してるけど、まだお前の

ことを許してるわけじゃないからな」

命「……あーそう」

不機嫌な顔をしているが逆に許してると思ったんだろうか。

水「まあ……いいか。お前を連れていくのが今は一番いいのかも。お前ならイウーのことも分かっているし、迷惑かけてもいい人だしな」

命「よーし!!そうと決まれば俺もチケット取らなきゃなー!!」
ノリノリである。

なんで僕は前まで怯えていた人にこんなことをしてるんだろうと考えていて、ふと気になることがあつて質問してみた。

水「なあ、お前って一体何者なんだ？」

命「ああ……言っておくべきか。分かっているとは思うが俺は霊術師だ。夢月家は元々霊術師の家系なんだ」

水「いや、それもだけど……なんで僕を守ろうとしてるの？」

命「最初は姉に言われて璃々色金を守るためにお前を殺そうとしたんだ」

水「姉？」

命「俺の姉は色金について調べてるんだ。俺はそうでもないけど霊術師は基本的に不可思議なことは知りたがるんだ。姉はそれが色金だったんだ。詳しくは言ってくれな

いが、お前を守るために殺せって言ったのは姉だ」

水「ふーん……」

命「でも、今は姉に言われたことは半分破ってるけどな!!でも其れでもいいんじゃないかって思ってる。お前死なないし」

水「まあね」

命「実際、俺は最初は姉のためだったけど、戦う度にどっちかって言うとお前のためにやってたからな。お前、俺の思ってたより良い奴だったからな」

水「そりゃあどうも」

そうやって褒められると少し照れてしまう。

命「……とりあえず、俺も準備は進めておくから、お前もしくんだぞ」

水「分かってる。出発は三日後だよ」

命「それじゃ」

そう言って、命は準備をしに自分のものにしたらしい元々空いていた小部屋に入っていた。

今回の依頼は少し面倒なことになるかもしれない。だから僕も早めに準備をしておこうと自分の荷物を置いている小部屋に戻った。

キンジ達と雪

咲「本当にそいつとで大丈夫なんですか」

空港で咲がヨーヨーを構えながら聞いてきた。

水「大丈夫だと思う。殺す気があるならとつくに寝てる間に殺されてるよ」

ちなみにそいつとはもちろん僕の隣にいる夢月命のことである。

命「そんなに警戒しないでくれよ」

咲「あなたが私を殺しかけたこと、忘れてませんからね」

命「それを言われるとなんも言えねーんだよなあ……」

まあ、咲には慣れてもらうしかないだろう。

咲「はあ……とりあえず気をつけてくださいね。向こうで何があるか分かりませんか
ら」

水「分かってるって。今まで気をつけてないことなかったでしょ」

咲「先輩なら外国の景色を見てうかれて気を抜きそうですけどね」

それはそうかもしれないと思わず苦笑いをしてしまう。

命「おい、時間だぞ」

水「おけ、行くぞ」

僕は咲に背を向けて行こうとすると、「行ってらっしゃい」と言われたので顔だけ振り向いて笑顔で手を振ってやった。

先輩が私に手を振っている中、私はどうしても警戒心が抜けないライフィーを睨んでいた。

すると、睨まれていることに気づいたのか知らないがライフィーがこちらを振り向いてきて、私に近づいてきた。

咲「……なんですか」

私がヨーヨーを構えたまま言うと、ライフィーは私の耳元で

ライフィー「雪に気をつけろ」

咲「え……?」

その言葉を理解できなかった私はそう返すことしか出来なかった。そして気づいたらライフィーは水先輩の隣に戻っていた。どうやら何か話しているようだったが、少なくとも水先輩もどこか楽しそうだった。

今日は疲れた。白雪を助けるために地下倉庫ジャンクシヨンに赴き、そこでアリアと白雪と魔剣デユランダ

との戦いに勝って、帰ってきたところだった。隣には当たり前のようにアリアはいるし、白雪も普通についてきている。それに白雪は俺に感謝の言葉を永遠と言うし、アリアもアリアでそんな白雪に喧嘩腰なものだから困ったものである。

これだけ頑張ったんだから少しくらい気を休ませて欲しいものだ。

と、行つたところで自室に着いたのだけど、その扉の前に見知らぬ人が立っていた。

「来た」

その二文字だけ言っただけなのだが、こちらの雰囲気は凍りついた。

なんだ、こいつの殺気とも言えない冷たい気配は。

「どうも、疲れてるところ申し訳ないんだけど私の話を聞いてくれるかしら？」

アリア「まず名くらい乗つたらどうなの」

アリアですら少しビビっているが凍りついている俺と白雪の代わりに質問してくれ
た。

「ああ、ごめんごめん。あと、三人ともそんなに警戒しなくてもいいよ？お姉ちゃん悲しいな……」

そんな気配を放っておいて何を言ってるんだこいつは

「私の名前は白福雪。あ、雪って呼んでいいよ」

その聞き覚えのある名字を聞いて、納得した。確かによく見ると水の髪を伸ばして、女にしたらこんな感じになりそうだ。

というかそれが本当ならこの人が兄さんの相方なのか。そりゃあ、本物の化け物だ。

雪「とりあえず上がってから話そうかな。様子を見るに、ジャンヌダルクの1人でも倒してきたんでしょ」

そういうと、鍵がかかっているはずの俺の部屋の鍵を針金を使って一瞬で開けて先に部屋に入っていた。

言われた通りに三人とも部屋に入ろうとすると

雪「あ、その黒髪ちゃんは帰ってもらえる？」

白雪「え……？」

白雪は一瞬抵抗するような表情をしたが、彼女の気配におされて渋々帰っていった。

キンジ「で、何の用なんだ」

雪「まあ、まず前提の話を言わせてもらおうと……私の弟は敵側の人間よ」

その言葉を聞いて、俺は凄く嫌な予感がした。

雪「……あと、キンジくん。私の相方は、まだ生きてるわ」

その言葉を聞いて嫌な予感は吹き飛んだ。

雪「いい表情ね。とりあえずこの話は後にして……本題に入るね。私は二人に協力して欲しくて来たの」

アリア「どういうこと？」

雪「これは、私にもあなたにも利益のあることなの。私も、イウーのことを追つてるの」

キンジ「なるほどな。でも相方もいないし、1人じゃどうすることも出来なくなったから俺達を利用しようってことだな」

雪「ぶつちやけそーねえー」

こんなに真剣な話をしているのにゆるふわな感じがあるのは水にそっくりだ。もうさっきの冷たい気配はなくなっていた。

キンジ「どーする、アリア」

俺はここはアリアに判断を委ねることにした。

アリア「……いい案だと思うわ」

そりゃあそうだろうな。双方目的は同じでしかもこちらは兄さんに並ぶ強力な戦力を得ることが出来る。

雪「じゃあ、契約成立ってことで……これ、私のメアドと電話番号ね」

そういうと雪は俺の部屋の窓を開けてペランダに行った。なんだろうと思って俺と

アリアはベランダに行くところにはもう彼女はいなかった。

アリア「あそこよ!!」

アリアが指を指している方向は下。

キンジ「この高さから飛び降りたのかよ……」

アリア「ワイヤーをかける音もしなかったしワイヤーもなしで着地したみたいね」

ちなみに俺の部屋は5階だ。そこからワイヤーなしで落ちるのは死ななくとも、かなり危険ではある。流石は水の姉にして兄さんの相方だと痛感させられた。